
じいさまからの遺産

てるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じいさまからの遺産

【Nコード】

N1764B

【作者名】

てるり

【あらすじ】

じいさまが死んだ。その孫に当たる三男の自分。そのじいさまがくれた遺産とは？

じいさまの死

あれはいつ頃だっただろうか。あまりにも綺麗だった満開の桜の中で、その犬は木の下に、捨てられていた。ダンボール箱に入っ
て。

上から花びらはどんどん舞い降りてきていた。

「桜……じゃあ、名前はサクラにしよう。」

そう、犬を拾ったじいさまは笑った。にこやかに、まるで光の中に溶けてしまいそうだった……。

もうすぐゴールデンウィークだという時期だった。

「遠藤！すぐに帰りなさい！おじいさんが亡くなったそうだ！」

担任の先生は、授業の三時間目が始まると同時に、教室に駆け込んできた。机で昼寝をして、夢から覚めたオレは、それが本当だとおもったのは、あまりに担任の顔が真っ青だったからかもしれない。

じいさまが死んだ。

うちは、大きな家だった。自分で言うのもなんだが、かなり大きいといえる。周りから見れば羨ましいように見えるようだが、生まれた時からこのサイズの家に住んでいるオレにはなんにも感じない。普通なら、そんなに大きな家なら問題の一つでもありそうだが、歳の離れた優秀な兄が二人もいて、普通のオレがいる。そのせいか、ケンカさえもしたことがない。なんの問題があるというのだろうか。

その大きな家の当主だったじいさまは、若い頃に起こした事業で大成功を収め、ついこの間まで引退後の生活を有意義に過ごしていた。それが風邪で肺炎を起こし、死んだ。新聞には載るし、テレビはやってくるし、なんだか、騒がしい。

「すごいねえ。」

人ごとのように、次男の勇次は言った。

「まあ、会長だったしなあ。ちょっと、ぼけていたけど。」
長男の勇一も言った。

「ほら、あなたたち、お葬式手伝って。」

母親はオレたちを追いたてた。

遺影の写真にはにやかなじいさまが写っていた。

喪主をしていた父親はテレビに映っていた。

オレはなんだか、他の誰かの葬式を見ているかのようにだと感じていた。

それから三日後。弁護士がやってきた。遺産の分配のためだ。しかし、三男のオレには何の関係もないと、そう、信じていた。オレだけではない、たぶん、誰もがそう信じていたのだろう。だから、居間に集まれと言われた時には目を丸くした。

「え、オレも行くの？」

「なんでも、全員参加だそうだ。」

兄はあっさりといった。

居間に集まると、家族は揃っていた。ばあさま、父、叔父、その妻たち、いとこたちも来ていた。それに兄二人にオレが最後に席についた。それで、全員のはずだった。

「その席は？」

叔父さんが聞いた。

そう、オレの前に一つだけ空席があった。

「そのことに関しましては、最後にお伝えいたします。それでは、遺産の配分ですが……。」

気になるような台詞から、その遺産配分の説明が始まった。半分はばあさまに。残りは父親と叔父に分けられた。

「それと、最後に、勇太さん。」

ぼんやりと聞いていたオレの名前が急にあがって、慌てて返事をした。

「あ、はい。」

「あなたには、おじいさまから特別に遺言があります。」

特別というだけで、なんだか、みんなの視線が痛い。

「えっと……どんな？」

「犬のサクラさんのお墓の面倒を見て欲しいということです。」

そこにいた全員が拍子抜けしたようだった。

「はい。」

「それと。」

弁護士の一言が怖い。

「サクラさんの二代目の面倒を見て欲しいということです。その費用として、一年間で五十万支払われます。」

「え？」

いま、五十万って言った？

「二代目？」

兄が聞いた。

「ええ。どうなさいますか？」

「いいですよ。」

オレは即答した。なんたって五十万！

「ではここにハンコ、がないようでしたら、親指でも構いませんよ。」

「

オレは素直に、書類に親指を押した。犬の世話くらい！

「その、二代目というのはどこに？」

父親が聞いた。

「もうすぐ、いらつしやいます。ああ、来ました。」

「こんにちはあー。」

つれてきた運転手の側には、女の子が立っていた。肩までくらいの髪を一本に結び、なかなか可愛らしい。

「彼女は？」

誰かが聞いた。

「二代目のさくらさんです。」

弁護士が答えた。

人間のさくら

人間のさくら

一代目のサクラというのは、まぎれもなく犬だった。じいさまが可愛がり、ひたすら面倒を見ていた。しかし、じいさまよりも犬の寿命のほうが先に来た。そして、ぼっくりと逝ってしまった。

それからというもの、じいさまはひたすら落ち込み、延々落ち込み、だんだん食が細くなり、体はやせていき、幽霊のサクラが呼び寄せているんじゃないかと、兄たちは言っていたものだ。

とにかく、家には体によくないと、ある日、散歩に送り出した。と、いつても運転手が見張り役でついていった。橋から飛び降りられても困る。

すると、じいさまは生き生きして帰ってきた。

「さくらに会ったんだ。」

「サクラは死んだでしょ。」

母は言った。兄たちは、ついにボケたのだろうか、ひそひそ話していた。

「違う、二人目のさくらだ。」

最初はどうにかなったのではないかと思ったが、どうやら、新しい犬に会ったのだということになって、じいさまがあれだけ幸せそうならいいかと、誰も会いに行くというのを止めなかった。生き活きとしてきたじいさまは、うれしそうに毎日出かけていった。

家につれてこないのは、誰かが飼っているのか、ペットショップにでもいるのか、それとも、最後まで面倒を見ることができないと思っていたからだろうと、勝手に誰もがそう思い込んでいた。

しかし、目の前にいる二代目のさくらは、どうみても、人間だった。女の子は、余っていた椅子にちょこんと腰をかけた。

一番、動転したのは、妻である、ばあさまだ。

「ど、どうということなの？さ、サクラが人間だなんて！柊、説明しなさい！」

怒鳴られた、柊というのは、運転手だ。それもじいさまの専用の。

「その。彼女が確かに、二代目のさくらさんです。」

「あ、あの人が、う、浮気？」

「違います！断じてそのようなことはありません！」

柊は慌てて、言ったが、ばあさまの耳には聞こえていないようだった。ばあさまはオイオイと泣き出してしまった。女の子が急に言い出した。

「梅ちゃんでしょ。」

ばあさまが顔を上げた。

「勇太郎、言ってた。妻の梅ちゃんは、白くて、ちっちゃくって、可愛い人だって。僕の最愛の宝物なんだよって自慢してた。それで、どっちが勇介さん？」

勇介というのは父親の名前だ。

「私だが。」

「勇太郎、言ってた。息子の勇介は、のんびりしているけど、こつこつやりつづける人だって。それについてこられるのは、辛抱強い、由里さん。じゃあ、こつちが、太郎さん？」

太郎は叔父の名前だ。

「あ、ああ。」

「もう一人の息子の太郎は、てきぱきしているけど、たまにそっつかしいって。それを支えているのが、由美さん。」

叔母は急に名前が呼ばれてちよっとおどろいたようだった。

「長男の勇一さんは、そのうち会社を継ぐ人。いとこの次郎さんは経営に回る人。次男の勇次さんはきつと自分の道を歩く。三男の勇太さんは。」

女の子はオレのほうを見つめた。

「私のお嬢さんになるの。」

「はぁー……？」

オレは大声を出した。

「そんなこと、聞いてないし！なに勝手に決めてるんだよ。」

「だって、勇太郎が言ってた。」

「じいさまがそんなこと言っていたってしらねえよ。そんなもの、関係あるか！」

「ダメ。契約したから。」

女の子は弁護士のほうを指した。さっきの書類！

「まさか！」

「はい。婚姻も入っております。」

「む、無茶言ふなよ！そんな契約破棄だよ。」

「できません。印を押しましたから。それに遺産ですし。」

「そ、そんな……。」

「もちろん、今でも結婚はできる年齢ではありますが、さすがにすぐというわけには行かないでしょうから、とりあえず、婚約者ということで。これに反するようなことをすると、ちよっと大変ですね。」

弁護士は顔色どころか、眉一本上げずに言い切った。

「まっつて。契約に反することをしたら、どうなるの？」

母の由里は聞いた。

「全員の遺産配分はそれぞれ、施設に寄付されます。」

この時点で誰もオレの味方はいなくなった。

「梅ちゃん。」

少女は、ばあさまを部屋の隅に引っ張っていくと、なにやら、耳打ちをした。ばあさまの顔が華やいだようになった。

「太郎さん。」

今度は叔父さんをまた隅に引っ張っていった。父さんにも何か言ったようだ。母さんには聞こえなかったようだ。

「以上よ。」

少女はにつこりと笑った。それを聞いたばあさまが言った。

「わかりました。それでは、さくらさん、ここに引っ越してきなさい。あの人の部屋でいいですか？」

「勇太郎の？いいよ。」

「え、ここに引っ越すの？だけど、誰だかわからないような子を…」

「勇次！」

兄さんがいいかけたのを、父さんが止めた。

「いいんだ。いつ、来られるかな？」

「んー。あさつてにでも。」

「わかった。手配しよう。」

兄さんたちと、いとこと、ばあさま以外の母親たちは顔を見合わせた。とりあえず、少女は柊と一緒に去っていった。

「あの子、なんだって？」

オレは聞くだけ、聞いてみた。

「いいんだ。気にするな。」

やっぱり父さんは答えなかった。それは、叔父もばあさまも一緒だった。誰も答える気はないらしい。

そして、おじさんたちは去っていき、兄さんたちは会社の寮に戻るからと帰った。あさつてからのことを考えると、なんだか、怖いような気がしていた。

引越しと登校

「あー、ここにおいて。」

荷物はそんなに多いことなく、やってきた。

「手伝ってやれ。」

父さんの命令でオレはしぶしぶ荷物を出すのを手伝っていたのだが……。なんだか、本が多い。

「何語？」

「それは、フランス。」

「全部？」

「ううん。あれこれ入ってる。」

なにやら、洋書が多い。

「どこにいたの？」

桜はそれには答えず、聞いた。

「それより、勇太郎とサクラの写真ない？犬のよ。」

「え、探せばあるんじゃないかなあ。」

「欲しい。」

「わかった、探してくる。」

オレは、それを口実に部屋から出て行った。本だらけのじいさまの部屋はなんとなく威圧感を感じる。写真はすぐにあった。しかし、オレはぎりぎりまで持って行こうとはしなかった。

「勇太、写真は？」

聞かれて、やっと渡した。

「これ。」

「ありがとう。」

さくらは、それをすぐに写真立てに入れて、机の上に飾った。なにやら、チャイムが鳴った。しばらくすると、母親が箱を持って、やってきた。

「さくらさん、これ、制服。」

「ありがとう、由里さん。」

「制服？」

「そう、勇太郎と一緒に学校に行くの。」

「えー……。」

オレはありったけのいやな顔をして見せた。しかし、さくらはそんなことはお構いなしに言った。

「明日から一緒に行こう。」

そう、葬式と、この騒ぎだけでゴールデンウィークは終わった。

「送っていけ。」

父の命令で、一緒に家を出たが、切符の買い方がわからないように、オレは定期を使って先に行った。面倒を見るとまでは言われていない。

学校についたオレは、あっちこっちから、慰めの言葉をもらった。

「大変だったな。」

「葬式、すごかったな。」

「大丈夫か？」

「ご愁傷様。」

そんな中で

「遠藤君。」

声だけでわかった。東 理江さんだ。オレはひそかに、彼女に思いを寄せている。

「ああ、ひさしぶり。元気だった？」

「うん。遠藤君も大変だったね。」

「まあ、ねえ。」

「おらー、席につけー。」

担任がやってきた。

「今日は転入生を紹介する……はずだったんだが、ちょっと来てな

くな。」

クラスがざわついた。

コンコン

ドアがノックされて、ドアが開くと、そこには見知らぬ男性がいた。

「校長先生、あ、君が？」

なにやら、ドアをはさんで話している。オレは、校長はあんな顔だったのかと改めて考えていた。始業式などで顔を見ているはずだが、あんなに近くで見たことはない。

「あ、勇太！」

さくらはオレを見つけるなり、うれしそうに手を振った。オレは慌てて、知らないふりをしたが、遅かった。

「なんだ、遠藤、知り合いか。じゃ、木村、席を移動してくれ。」

「はい。」

木村はそのままさくらが座る場所に移動した。

「彼女は、さくらさんです。じゃ、出席とるぞー。」

出席をとり終わると、担任は言った。

「おい、遠藤、彼女の校舎案内頼むぞ。」

返事を待たずに、担任は出て行った。出席をとり終わると、一時間目との間に、生徒がわつとやってきた。ほとんどは野次馬だ。オレのことはほつとして、彼女にばかり男どもは声をかけていた。

「遠藤と知り合いなの？」

「どこから来たの？」

「苗字は？」

あれこれ飛んでくる質問にさくらは無言で笑っていた。

「遠藤と、どういう関係なわけー？」誰かが聞いた。

「婚約者よ。」

「馬鹿！」

オレは慌てて、止めたが遅かった。

「えーーーーー。婚約者あ！？」

オレは慌てて、東さんの方を見つめたが、彼女はぷいっと顔を背けてしまった。とにかく、野次は止まらず、ああでもない、こうでもないというさい。ぶちつと何かが切れたオレは大声で言った。
「うるさい！じいさんの命令なだけだ！好きでもなんでもない！」
自分で言うのもなんだが、温厚なオレが怒鳴ったせいかクラスは静かになった。

「はい、一時間目始めますよー。あら、どうしたの？」
ちよつとんとした一時間目の先生の言葉にクラスメイトたちはようやく、自分の席へと移って行った。

昼休み。

「勇太、案内して。」

さくらはさっきの言葉がなんでもなかったように、オレに言った。
「勝手に回れよ。」

「あ、じゃ、僕が案内しますよ？」

「オレも。」

次々に声がかかる中、さくらはきっぱりと言った。

「勇太以外の男性とは二人では出歩かない。」

オレは呆然として、さくらを見ると、彼女はにっこりと笑った。

「俺たち、全員なら？」

男の一人が言った。

「じゃ、私が案内してあげる。」

「東さん。」

そこには、たしかに、東さんがいた。

「うん。ありがとう。お名前は？」

「東 理江。」

「理江さんだね、私、さくら。行こう。聞きたいことがあって……。」

「なにやら女同士、にこやかに出かけていった。」

「に、してもさあ、可愛いな。」

「なあー。」

男子たちはやにやし、女の子たちはなにやらこそこそ話している。

「女子トイレはここよ。」

「あー、ありがとう、これだけは聞きたかった。あ、グラウンドが見える!」

ぱたぱたと走っていく、後ろ姿をゆっくりと追いかけて、追いつくと、理江はそつと聞いた。

「さくらはどこから来たの?」

「ん? 勇太の家から。」

理江は目を丸くした。

「え、一緒に住んでいるの?」

「うん。勇太のパパとママ、あと、うめちゃんと。」

「うめちゃん?」

「パパのママ。」

「ああ、おばあさんね。」

「そう。」

「え、いつから住んでいるの?」

「勇太郎がいなくなってから。」

「おじいさんね……勇太郎っていうのね。」

「うん。」

「それじゃあ……。」

キンコンカンコンコン。

「あ、チャイム。戻ろー。」

さくらはぱたぱたと走っていった。それをゆっくりと理江は追いかけていった。

弁当の時間も東が声をかけてきて、さくらは彼女たちのグループに収まることになったようだった。オレと一緒にじゃないと食べないなんて言い出さなくてよかった。メンバーは、東と近藤だ。

弁当は、母さんが作った。いままでは一人分だったけど、二人分なら作ってもいいと、作ってくれたが、はつきりいって、足りない。どっちにしろ、パンを買いに行く手間は省けなかった。

カラオケにて

放課後。

オレと仲のいい三人組が声をかけてきた。さつき席を替わった木村もそのうちの一人だ。

「遠藤、カラオケ行かないかー。」

「あー、婚約者がいるからダメかあ？」

田中も言った。もちろん本気で言っているわけではないが、冷やかされて、なんとなくむっと来た。

「行くよ。」

田中が誘った。

「あ、さくらちゃんもどう？」

しかし、彼女は首を振った。

「うっん、歌える歌もないし、用があるから。じゃあね、勇太。」

さくらは手を振って、去っていった。

「じゃあねえかあ。可愛いな。」

「うんうん、遠藤にはもつたいない。」

「あのな。」

オレは抗議したが、そんなことは聞いちゃいない。

「笑顔がいいんだよ。」

「そう？」

「そうだよって、亜紀……。」

木村の彼女が後ろにいた。

「へえ、ああいう子が好きなんだあー。へえ。」

「いや、あの、もちろん、亜紀のほうが可愛いよ。」

「ふんつ。」

「あ、亜紀……。」

木村は慌てて、彼女の後を追いかけていった。

「あーあ、怒らせた。」

「そりゃ、怒るよな。」

「だろうな。とりあえず、玄関で待ち合わせだから行こう。あ、近藤たちもカラオケ行かないか？」

くるりと振り向くと、東とその友だちの近藤が立っていた。田中は、この近藤さんに気があった。ようだった。

「行く？」

「いこうか。」

女同士で結論が出たらしい。

カラオケには仲直りしたのか、木村たちと田中、東さんに近藤さんで、全部で六人で行くことになった。

カラオケにて。

まだ、オレの婚約の話は続いていた。部屋に入るなり、木村が言い出した。

「それにしても、急な話だよなあ。高校生で結婚なんて。」

「俺なんてなんにも考えてないけどね。」

「オレだって！急に聞かされたんだ。」

とにかく、東に聞こえるように、誤解されないように、一生懸命に事の顛末を話した。

「でも、結婚するんでしょ？」

亜紀が言う。こいつは、オレと小学校の時から付き合いのせい、か、ずけずけものを言う。

「知り合ったばかりで、できるか！っか、しねえよ！」

「やっぱり、家が大きいから政略結婚とかじゃないのか？」

「ええ？」

俺は怪訝な顔をした。

「家は兄さんたちが継ぐんだよ？政略結婚するなら兄さんたちだろうが。だいたい、いまどき、そんなものあるか？」

「あら、ドラマだとあるわよ。」

近藤が言う。

「オレの場合は現実に起こっているの。」

「ねえ、あの子、一緒に住んでいるのよね？」

「あ、ああ。」

「そうなの？」

亜紀が目を丸くした。

「ばあさまが勝手に家に入れたんだよ。」

「あのこ、ちよつと言葉に癖があるけど、どこから来たの？」

東が唐突に言った。

「さあ？」

「ええ！？知らないの？」

亜紀はますます目を丸くして言った。

「え、いや、聞いたけど、答えてくれなかった。」

「あやしいー。」

マイクを使って響く声のままで、田中が言った。

「なんだよ、なにがだよ！」

「身分隠して花嫁修業かなあ。」

近藤はなにやら夢を見るかのように言った。

「よし、俺、これ歌う！」

急に田中は数字をいれて、最近のドラマの主題歌を歌いだした。

なんとなく、今の話がオレの頭の中でぐるぐる回っていた。政略結婚……。

食事風景

家に帰ると、台所のほうが騒がしい。覗いてみると、母さんとさくらがなにやらやっている。

「こう？」

「こうよ。」

「ただいま。」

「あ、勇太、おかえり。いまねえ、勇太の好きなチキンの煮物を習っているの。もうすぐできるよ。」

にこにこしながら、さくらは言ったが、オレには関係ない。

「あつそ。着替えてくる。」

そう言って、オレは自分の部屋に戻った。着替えてから、そのままオレはばあさまの部屋に向かった。

「ばあさま。」

「ああ、おかえり。なんだい？」

ふすまを開けると、ばあさまはなにやら、アルバムをめくっている。

「なにしているの？」

「ふふふ。あの人と出会ったときの写真を見ているの。」

当然白黒だが、清楚な女性と、ふさふさに髪のアったじいさまが笑って立って、映っていた。

「……なあ。ばあさまとじいさまはなんで結婚したんだ？」

「お見合いよ。」

「へえ。初めて聞いた。そのときに好きだった人とかいなかったの？」

「いたけど、病気で亡くなってしまっただけ。そのあと、あの人に会った。あの人は優しい人だね。一緒に墓参りにも行ってくれたのよ。それで、決めたの。あの人と人生を一緒に歩んでいこうって。」

ばあさまは写真をそっと抱きしめて、懐かしそうに目を細めて

かすかに笑った。

「……オレさ。好きな子がいるんだよね。もちろん、まだ結婚したいってわけじゃないけど。やっぱり、さくらと結婚しないと、まずいかな？その、全然好きじゃなくても。」

「……。」

「やっぱり、遺産が全部寄付されたら、生活に困るよね。婚約破棄とかできないよね。なんで、じいさまはあんな遺言を残したのかなあ。」

ばあさまは少し寂しそうに言った。

「……そんなことにはならないと思うわ。」

「え？」

「ご飯よー、うめちゃあーん。勇太、どこー？」

遠くからさくらの声が聞こえてきた。

「さ、ご飯だつて。行こう。」

「ば、ばあさま？」

振り向くことなく、ばあさまは食事の部屋へと向かっていった。

食事中もばあさまはさっきのような寂しげな顔は見せることなく、にこにこと食事をしていた。あれは、どういう意味だったのだろうか？

「勇太、おいしい？」

「別に。」

「……由里さん、つままないねえ、反応が何もないなんて。」

「そうねえ。でも、慣れていくものでしょう。」

「へえ、そうなんだ……でも、勇太郎は由里さんの料理はおいしいって言ってたよ？体のことも考えて、塩分は控えめになっているし、勇太たちとは別に作ってくれていたって。」

「そうなの？」

初めて聞いた話だ。

「え、ええ。だって、あなたたちとお母さんたちじゃ、中心になるものも違うし、味だって違うから。」

「いつも、ありがとう、由里さん。」

「そ、そんなお母さん、お礼なんて。」

急に改めてお礼を言われたせいか、母さんはオロオロしだした。

「じゃ、明日はうめちゃんの番だね。」

「なにが？」

「明日は由里さんはお休み。うめちゃんに料理を教わるの。」

「え？」

オレは考えてみた。思い出す限り、ばあさまが台所に立っていた記憶がない。

「料理なんてできるの？」

「こら、勇太！」

「だって、台所にいるの、見たことないよ？」

「ほほほ。そうでしょうね。最後に台所に立ったのは、あなたが由里さんのお腹にいる時だったから。本当はね、勇介が結婚した時に、もう台所はお嫁さんのものだ、完全に明け渡したのよ。でもねえ、あんまりにもつわりがひどくて、さすがに見えているだけっていうのもねえ。そのときだけは手伝ったのよ。」

「へえ。」

「ただいまあー。」

「あ、勇介だ。迎えに行ってくる。」

さくらはばたばたとかけていった。つられるように、母さんもばあさまも玄関へと迎えに行った。オレは飯を食いつづけながら、ばあさまが台所に立たなくなったのは、その頃からだったのかと、ぼんやり考えていた。

学校生活

～学校生活～

翌日。オレはさくらと一緒に家を出た。さくらは定期を買ったらしい。

「買ったんだ。」

「うん。買ってくれた。」

「へえ。」

オレはそのまま、行きかけて……。

「まて、買ってもらった？誰に？」

「校長先生。」

「校長？うちの学校の？」

「うん。なんで、校長が？」

オレは思わず、あたりを見回した。まるでそこにいるかのよう

に。
「寝坊したんだって。」

「ね、寝坊？」

「うん。普段はいないって言ってた。」

「あ、あつそ。」

ほつとして、電車に乗り込んだ。定期代は返さないといけないだろうなあと考えていた。面倒を見るということは、定期代金も出さないといけないんだろうか？

「お。二人で登校か？」

電車に乗るなり、木村に会った。

「あれ？今日、亜紀は？」

「ああ、あいつは今日は部活。」

「部活？つてなに？」

さくらが聞いた。

「陸上だよ。」

「陸上？」

「そう、走るの。長距離の選手なんだ。」

「へえ。」

オレはなんだか、さくらの言った言葉になにか違和感を感じていた。さくらは部活の内容を聞いたのではなく、部活とは何かを聞いたのではないだろうか？オレは慌てて、首を振った。こいつのことはなんか、考えている場合じゃない。次の駅で、東さんが乗ってくる。

その次の駅。東と近藤が乗ってきた。

「あら、今日は一緒なのね。」

「おはよう、理江。」

「あ、いや、たまたま、方向が一緒だし。」

オレは慌てて、言ったがあまり気にしていないようで、東はさくらに聞いた。

「昨日は一人できたの？よく道がわかったね。」

「ううん。校長先生と一緒に来たの。」

「校長と？電車で？」

「あー、なんか、寝坊したらしいよ。校長でも、寝坊することなんてあるんだな。」

「あるんだ。」

木村も驚いたように言った。

「寝坊？……そう。」

なんだか、怪訝な顔をしたまま学校につくまで、東は黙り込んでいた。聞いたことがないが、そんなに校長の寝坊がおかしなことだろうか？

オレの頭にははてなマークが浮かんでいた。

電車を降りてからの学校までの道のりが、こんなにも長いものだと。あっちこっちからヒソヒソと聞こえてくるのだ。

「婚約だつて。」

「え、あの人が？」

「結婚？もう？」

「誰が？」

木村にも聞こえているのか、言った。

「おまえ、人気者だなあ。」

「こういうのは人気者って言わないんだよ。まったく。」

ちよつとオレは後ろを振り向いてみたが、さくらと東さんはまったく気にせずに、しゃべりながら歩いていた。オレも安心してそのまま歩きつづけていた。

クラスにつくと、席は隣同士。早く席替えにならないものだろうか。オレはなんとなく、ため息をついた。

一時間目の授業でさくらが、きれいな英語を話すことがわかった。「どっか外国にでもいたのか？」

さくらはそれには答えずにただちよつと微笑んだ。

「ひみつー。ふふふ、本当に知りたい？」

「いや、いい。」

なんとなくその笑顔に負けたような気がしそうで断った。

二時間目の授業でさくらが、数学がすいすいとける事がわかった。

「得意なのか？」

「うーん。普通？」

その普通のレベルでも解けないオレって一体……。

昼休み。トイレから出てきた、オレは東さんに会った。

「や、やあ。」

我ながらこんな台詞しか出てこない自分が情けない。

「ちよつと、話があるんだけど。」

その言葉だけで、オレの心拍数はかなり高いものになっていた。

「さくらさんのことで。」

ちよつとがっかりしたが、やきもちでも焼いてくれているのだろ

うか？廊下の隅まで行くと、聞いた。

「なに、話つて。」

「あのね、朝、彼女は昨日、寝坊した校長先生と一緒にきたって言うていたでしょう？」

「うん。」

「でも、うちの校長先生つて、学校からすぐのところに住んでいるのよ。」

「そうなの？……え、じゃ、電車になんて乗らないのか？」

「そうなのよ。なんで、わざわざ、電車に乗ったのかしら？」

「……さあ？一緒に来たのが校長じゃないのかもな。」

「でも、クラスまでつれてきたのは、たしかに校長先生だったわ。」

「ああ、そういえば。でも、そんなに気にすることでもないんじゃない？」

オレは明るく言つたが、東さんはなにやら考え込んでいるようだった。

「……そうねえ。」

彼女はそう言つて、クラスへと戻つていったが、どうも、表情は晴れなかった。そんなに気になるようなことだろうか？

教室に戻ると、田中はさくらを部活に誘っていた。

「コンピュータ部にこない？」

「陸上部でもいいよ。」

亜紀が言う。

「放課後のグラウンドで青春の汗を流す！いいでしょ。」

「いいかあ？」

「田中君は、インドア派だからねえ。」

さくらはそれを聞きながら、にこやかに微笑んでいた。

「あ、勇太。いまねえ、部活の話をしていたの。」

「あつそ。」

オレはガタゴト音と立てながら座った。

「勇太は何をやっているの？」

「放送部。」

「なにをするの？」

「放送。」

オレはそっけなく言った。

「そんな説明があるか！放送部はね、食事中に曲を流したり、伝達事項を流したり、呼び出しをしたりするんだ。体育祭や文化祭の司会進行なんかもやるんだよ。ちなみに、俺は野球部だけど。マネージャー募集しているよ。」

「へえ。理江は？」

「え、ああ、私も放送部よ。」

「そっか。」

オレは東さんを追いかけて放送部に入ったのだ。

「お、妻として一緒に部活に入るか？」

木村はにやにや笑いながら言った。

「おい……。」

「うっん。」

さくらは首を振った。

「放課後は用があるから。」

「何？塾？」

「うっん、うめちゃんに料理教わるの。」

「うめちゃん？」

「オレのばあさま。」

「ああ、そっか、一緒に住んでるんだっけ。」

亜紀から聞いたのか、木村は知っているようだった。

「お、同棲か？」

田中がからかった。

「同居だ、同居！」

オレは慌てて、東さんのほうをうかがったが、彼女はなにやらまだ考え込んでいるようだった。さくらがこっちを見ているのにも気

がつかずに。

放課後。オレは東さんと二人で無言のまま歩いていた。さくらは先に帰るとさっさと帰っていった。さっきまでは何人か仲間がいたが、だんだんといなくなっていくのだ。駅につくとやっとオレは声をかけた。

「まだ、考えているの？」

「え？」

「校長のこと。」

「え、あ、うん。それもあるんだけど、他にもあるの。」

「なに？」

「ほら、今日、部活の話をしていたでしょう？」

「うん。」

「そのとき、最初にさくらちゃん、部活っていう言葉の意味がよくわかってなかったみたい。あの子、部活がない、外国から来たのかしら？」

それならあんなに英語を綺麗に話せるのも頷ける。しかし、オレは思い出していた。

「でも、あの子が持ってきた荷物の中に、本があっただんだけど、フランス語だったよ？」

「フランス？」

「オレは、中をみてもわからないけど、本人がそう言っていた。」

「フランス……。」

「あ、あのさ、明日校長に会いに行くんだ。なんか、定期代を出してもらってもらったみたいだし。オレ、そのときにでも聞いてくるからさ。なんなに考えることないよ。」

「……うん。」

電車が来た。その音にかき消されて、東が何を言ったのか聞き取れることはできなかった。

「答えてくれるかしら……。」

帰宅後

（帰宅後）

家に帰ると、やっぱり台所が騒がしい。覗き込んでみると、ばあさまとさくらが、ああでもない、こうでもないとなにかやっている。「あ、お帰りー。今日は煮物だよー。」

「ああ。」

「お帰り。着替えておいで。もうすぐ、できるよ。」

「わかった。」

オレは自分の部屋に向かうと、じいさまの部屋が開いている。いまはさくらが使っている部屋だ。覗き込むと母さんがいた。

「母さん。」

びくつとしたようにこわばった顔のままでこっちを向いた。オレだとわかると、ほっとしたようだった。

「ああ、びっくりした。なんだ、お帰り。」

そう言いながら母さんは部屋から出てきた。

「何、していたの？」

「うつん、別に。」

そういつて、母さんは居間のほうへ歩いていったが、オレは着替えながらぼんやり考えていた。母さんはさくらのことを調べていたのではないだろうか。

着替えが終わって食事のテーブルに行くと、もうほとんどが並べられていた。母さんは椅子に座っている。オレも何も言わないまま座り込んだ。

「あー、勇太、運ぶの手伝ってよ。あ、由里さんは座っていて。」

立ち上がった母さんをさくらは座らせた。

「ほら、勇太。」

「わかったよ。」

しびしびながら、オレは台所に取りに行った。

「あら、勇太がくるなんて珍しい。いつも由里さんにやらせているのに。」

ばあさまも目を丸くした。

「別に、やらせているわけでは……。」「

オレはそういったが、自分が一度も自分の食べる物を運んだことがないことに気がついた。

インターホンが鳴る。

「あ、勇介かも！」

さくらはあわてて玄関へと向かっていった。ばあさまと母さんがそれに続いた。

だが、来たのは父さんではなく、弁護士だった。

「勇太さんに、五十万渡しにきました。」

そして、そのまま封筒をオレに渡すと、弁護士はぺこりとさくらにも、頭を下げて帰っていった。

「本物だ。」

中を覗くなりオレは無意識に言った。

「へえ、ホントだ。」

さくらも覗き込んでいる。

「見るなよ。」

「いいじゃん、見たって減らない。」

「減るんだよ。」

「ほら、しまつてきなさい。」

「うん。」

母さんの一言でオレは自分の部屋の引き出しに閉まった。そして定期代金のことを思い出した。明日、校長に会わなければ……。

翌日。校長は休みだった。なんでも出張らしい。その次の日もいなかった。

そのまま土日になった。めずらしく、朝起きると、父さんがいた。いつものスーツではなく、洋服に着替えてコーヒーを飲んでいる。

「あれ、どうしたの？珍しいね。家にいるなんて。」

「いや、さくらちゃんにあっちこっち案内でもしてやろうかと思っ
たんだが……。」

「が？」

「でかけてしまつてね。」

「でかけた？どこに？」

「母さんたちと、父さんの墓参り。」

「じいさまの？あ。オレ、全然、サクラの墓の面倒みていないや。」

「おいおい、父さんの遺言なんだから、しっかりやらないと。」

「まあねえ。なあ、父さん。」

オレは自分の分のコーヒーを入れながら、話しかけた。

「なんだ？」

「さくらはどこから来たのさ？英語は話せるし、本はフランス語だし。どこの国の人？」

「なんだ、結婚する気になったのか？」

オレは飲みかけのコーヒーを噴出した。

「そんなわけないだろ！結婚なんかするかよ！」

「それじゃあ、聞いてもしようがないだろ。そこ、拭いとけよ。」

そついい残して、父さんは自分の書生へと戻っていった。

「口が堅いなあ……。」

オレは素直にテーブルを拭いていた。

「ただいま。」

「おかえり。」

玄関前に迎えに行くと二人だけだ。

「あれ、さくらは？」

「一代目のほうのお墓を見てくるって。あんたは行かなくていいの？」

「……行くよ。」

オレは着替えて出かけることにした。サクラの墓はじいさまの墓とは違う場所にある。桜がもつときれいなところのほうがいいだろうと、じいさまはある土地を買い取って、そこに桜の木とともにサクラを埋めた。

「つまり、歩かなきゃいけないってことなんだよな！」

山の上のほうを買い取ったせいか、車でもいけず、歩くしかない。しかも、結構歩くのだ。なんでも、サクラと通った散歩道らしいが……。

「まったく、もう……面倒だな。」

愚痴も出るというものだ。

「あれ……あ、いた。」

桜の木が見えてきた。さすがにこの時期はただの緑色の葉っぱしかないが。

もつと近づくと、さくらが見えた。オレはそのとき、何を思ったのか、驚かすことを思いついた。後ろから、そおつと近づいて……。そのとき、小枝を踏んだ。ぽきつと音がするなり、さくらは振り返り、拳銃を向けた。目もにらみつけるように鋭い。オレは慌てて、手を上げた。

さくらは、ほつとしたように銃口を下ろした。

「なんだ、勇太か。」

「なんだじゃないだろ、なんだよ、それ！なんでそんなもの、持つてるんだよ！銃刀法違反だぞ！」

「これ？おもちゃだよ？」

「……え？」

「中身はただの唐辛子水。なめる？からいよおー！」

「いい。いらん。おもちゃにしても、なんでそんなもん……。」

「あら、だって、か弱い乙女一人じゃ、襲われるかもしれないですよ。いまの勇太みたいに。」

「誰も襲ってないだろ。」

「どうだかー？」

「誰が襲つか！」

「はいはい。それより、どうしたの？こんなところまで。いままで来たことなかったのに。」

「別に。金、もらったから来てみただけだよ。結構、綺麗じゃん。」

「うん。そうだね。」

「これなら、しばらく来なくてもいいかもな。」

それにさくらは答えずに、ポツリと言った。

「本当にそお？」

それだけいうと、さくらは思いっきり山を走って降りていった。

「おい！」

声をかけたが振り返ることなく走っていった。

「なんなんだ？」

桜の木だけが、なにやらざわざわと葉っぱを鳴らしていた……。

「お墓、綺麗だったでしょう？」

家に帰ると、ばあさまが聞いた。

「そうだね。」

「そりゃあ、あの子が雨の日以外は、磨いているからね。」

母さんも言った。

「そうなの？」

「知らなかったの？」

そういえば、放課後はいつも用があるからと先に帰る。それはこのためだったのだろうか。じいさまの部屋のドアはしっかりと閉められていた。

校長室へ

「校長室へ」

はつきり言つて。ごく普通の、一般の生徒が校長室に入ることなんてほとんどないのではないかと思う。

月曜になってやっと校長が戻ってきたのだ。

昼休み。オレは思い切つてドアをノックした。

「はい？」

「失礼します。」

「はい、なんででしょう？」

たしかに、普段、壇上で見る顔がそこにあつた。こんな顔だつただろうか？近くで見ると、なんとなく、印象が変わる。

「あの、オレ、一年四組の遠藤と言います。さくらがお世話になつたみたいで、定期代を持ってきました。」

「さくら？」

「はい、あの。うちのクラスの転入生です。校長先生が連れてきた。」

「苗字を知らないのだから、他にいいようがない。しかし、それだけでわかつたようだった。『ああ！それで、わざわざ？いやいや、どうも。』」

「いえ、こちらこそ。」

「そうか、君が勇太君かい？」

「……はい。」

「ああ、そうか、さくらさんから聞いたよ。婚約者だつてね。」

「ええ……まあ……。」

まさかこんなところで、それはじいさまの勝手な遺言だとはいえない。

「ああ、じゃ、受け取るよ、どうもありがとう。」

「こちらこそ。」

オレは校長に封筒を渡した。ついでに聞いてみた。

「あの、校長先生の家ってこの学校の近くって聞いたんですけど、本当ですか？」

「そうだよ。歩いて五分くらいのところだ。」

「じゃ、どうしてあの日、さくらと一緒に電車に乗っていたんですか？」

「……。まあ、いろいろあってね。あ、君、もうそろそろ、次の授業が始まるだろうから、戻りなさい。」

「あ、はい。失礼します。」

オレは目が点になっていた。なんだ、あの急な追返しは？教室に帰って、東さんにそのまま伝えた。

「教えてくれなかったよ。」

「そう……。」

「なんの話？」

さくらがやってきた。

「定期代。」

「定期代？」

「校長に返してきたんだ。」

「ああ、ありがとう。あ、チャイム。」

さくらはぱたぱたと走った。そんなに走るような距離でもないのに。

〈家族〉

ある日。

帰宅をすると、今の前で母親が中をうかがうように見つめていた。そつと俺が近づいていくと、びくつとしたように振り返ったが、オレだとわかると明らかにほっとしたようだった。

「なに、してんの？」

「うっん、別に。おかえり。」

「ただいま。なに、父さん、帰っているの？」

「ええ。お母さんと、さくらちゃんと仲良く話しているわ。」

なんだか、オレはその言葉に寂しさを感じた。

母さんが立っていた場所にオレもたって中をのぞきこんでみた。すると。その光景はなんだか、家族のようだった。孫とお婆さんと父親。秘密の共有。オレと母さんには知らされていないさくらのことをあの二人は知っているのだ……。母さんが寂しく思っているのではないかと、ふとオレは思った。

六月

～六月～

そのまま五月はすぎた。

そして六月。婚約のことも囁かれなくなった頃、へんな話を職員室で聞いてきたと、誰かが言い出した。それを一番に聞いてきたのは、木村だった。野球で他のクラスに知り合いが多いせいか、こういう話は一番に伝わるようだ。

それは、いつのまにか、一緒に食事をするようになった場のことだ。

「なんでも、テストでへんな点数の奴がいるらしい。」

「へん？どう、へん？」

亜紀が聞く。

「あ、俺もちよつと聞いた。」

田中に先を越されないように、急いで木村が続けた。

「なんでも、五十点なんだと。」

「何が変なの？真ん中つてだけじゃない。」

近藤が言った。

「ちがうんだな。全試験、ちよつと半分なんだと。」

「すごいけど、偶然でしょ。」

「どうかしら。」

東さんが言い出した。

「なに、どういうこと？」

「だって、五十点っていうのは、百分の一の確率でしょ？」

「え、半分じゃないの？」

亜紀が言った。

「ばーか。」

オレが言う。

「なにが？だって、百の半分じゃない。」

どうも亜紀にはわかっていないようだ。

「あとで、説明してやるから。それで？」

木村は先を促した。

「それが、五科目全部だとしたら？百の五乗分の一よ。そんなことあるかしら？」

「すごい確率だな。」

田中も感心している。

「そういえば、俺、さくらちゃんの斜め後ろだろう？あの子、あんなに英語が話せるのに、テストの点数、五十点だったな。」

「え、なんか、まずいこと言った？俺。」

「ただいま。」

さくらが戻ってきた。じゃんけんで負けて、全員分のジュースを買いに行かされていたところだ。

「あ、オレ、いちご。」

「俺のはこれ。亜紀はこれだよな？」

「うん。」

「ご苦労だった。」

このゲームの言い出しだった田中はなんだか、満足げだ。
「うん。」

走ってきたようで、さくらはちょっと息切れをしている。

「あれ、さくらちゃんの分は？」

東が言う。テーブルを見渡すと、一つ足りない。

「あー。買い忘れたー。行ってくるー。」

さくらは再び、ぱたぱたと走りだした。

「元気だねえ。結構距離あるのに。」

田中が言う。

「さくらちゃんって、家でなにしているの？」

近藤が聞いた。

「なにつて？えーと、犬とじいさんの墓を磨いたり、料理作ったり、そんなもん？」

「今度、遠藤君の家に遊びに行ってもいい？」

東が言い出した。

「え、あ。うん。いいよ。いつくる？」

「あ、俺も行く。」

「あたしも、久しぶりに行こうかなあ。」

「明日は？」

「いいねえ。オレの部活休みだし。」

オレを置いて進められていく話に、オレは目を丸くした。

「待てよ、全員くるのか？」

「いいじゃないか、広いんだから。」

唯一、家に来たことがある亜紀が言った。

「そうだけど。」

オレは東さんだけに来て欲しい……。

「ただいまあ……。」

へろへろになりながら、さくらが帰ってきた。

「早く食わないと、弁当の時間終わるぞ。」

「はい。」

さくらは急いで、食べ始めた。なぜか、そのまま話は昨日のテレビの内容へと移っていった。

「じゃ、またね。」

さくらはいつものように先にクラスから出て行こうとした。

「待てよ。今日はみんな帰るぞ。」

オレはなんとなく、それを止めた。

「みんな？なんで？」

「うちにくるんだ。」

「うち？つて、家ってこと？」

「そうだよ。」

「え、これから？」

「そうだよ。なんだよ、オレの家だぞ。なんか文句あるのか？」

「……ないけど。」

「じゃ、行くぞ。」

そのままゾロゾロとクラスを出ようとしたときである。

「遠藤、待った。」

振り返ると、担任がなにやら、紙をひらひらさせている。

「お前、このプリント、出していないだろう。今日提出だ、いますぐに出せ。」

「えー、どこやったかなあ。」

カバンをこそごと探し始めた。

「おい、早くしろよ。」

「どうして出さないのよ。」

「まだか？」

「勇太。私、お墓に行くから先に帰るね。あとでね。」

さくらはそう言った。

「あーはいはい。」

オレは適当に返事をして、がさがさとカバンの中を捜しつづけた。

「あつた。」

プリントはカバンの中ではなく、机の中にあつたのだ。

「やつとかよ。」

待ちくたびれて、田中は椅子でまんがを読んでいた。

「悪かったよ。あれ？さくらと東さんは？」

「さくらちゃんは先に帰るって。理江はなにか、さくらちゃんに話があるからってついていった。」

「なんだあ？」

「俺、思っただけど。東って、なんかさくらちゃんのこと、気にしているみたいだよな。」

「あー、俺もそう思う。なんでだろう。近藤さん、知っている？」

「詳しくは知らないんだけど、なんか、さくらちゃんをどこかで見
たことがあるらしいの。」

「どこで?」

「それは思い出せないんだけど、それがずっと気になるみたい。」

「へえ。それでか。」

「あー、思い出せないとすっきりしないもんねえ。」

「とにかく、行こうか。あとで、さくらちゃんが帰ってくれば、東
さんもくるだろうし。」

「そうだな。」

そう、オレは言ったが、なんだか、妙な気分になっていた。東さ
んはさくらを一体、どこで見たのだろう?

そのころ、東はさくらの後を追いかけていた。駅までの歩き、
電車の中。東はその後ろ姿を見ながら、考え込んでいた。

『どこで、見たんだっけ?』

さくらはそのまま、家のある駅を過ぎて、他の駅で降りた。そし
て、そのまま改札から出て行った。

『しまった。このままじゃ、出られない。』

定期で入った東は当然、自分の遺影のある駅以上に進めば改札か
ら出ることはできない。急いで清算をして、さくらが向かったほう
へと走っていった。

『いない。』

そこを通りかかった人を捕まえてみた。

「あの、この辺に墓地ってありませんか?」

「さあ?」

三人目でやっと墓地の方向を教えてもらい、東はその方向に向か
って歩き出した。

家

「家」

大きなものを近くで見ると、つい見上げる形になる。

「でかいなあー。」

「ホントだなあ。」

「ひさしぶりに見たけど、やっぱり大きいよね。」

見慣れているはずの亜紀でさえ、そう言った。

「ほら、行くぞ。」

あきれたように勇太はいった。門を開けると、誰かが電柱の影から出てきた。

「あ、あの、この家の方ですか？」

「そうですね？」

「あの、女の子、いませんか？みなさんとおなじ歳くらいの。」

オレは木村と顔を見合わせた。

「さあ？ここには、そんな若い人はいませんけど。こいつくらいなもんで。」

と、木村が言った。

「そ、そうですね。どうも。」

男性はぺこりと頭を下げて、どこかへと去っていった。

「なに、あれ。」

亜紀は顔をしかめた。

「さくらちゃんのことだよねえ？」

田中も言う。

「そうだけど、なんか、あやしげだし。黙っておいたほうがいいよ。」

「そうだな。」

「あれ、勇太、どうしたんだい？」

ばあさまがドアを開けて待っていた。どうやら、門が開いたのに、いつまでも入ってこないのが気になったようだ。

「ああ、なんでもない。ほら、行くぞ。」

オレはみんなを家の中に招き入れた。部屋で大騒ぎをしていると、部屋がノックされた。

「はい？」

ドアが開くと、そこにはさくらがいた。

「ただいま。」

「さくら。あれ、東さんは？」

「え、理江？会わなかったよ？」

「マジで？」

「そうなの？」

「あら、どうしたんだろう。」

「心配だな。昼間はそんなことがあったのに。」

ああでもない、こうでもないと話しているうちに、さくらの姿は消えていた。夕方になり、みんなは帰った。さくらは、今日はかあさんに料理を教わる日だったのか、なにやら手伝っている。

食事の後、オレはさくらに聞いた。

「さくら。」

「なに？」

「東さんと何か話したのか？」

「なんで？」

「……いや。」

「へんなの。」

そういつて、さくらは自分の部屋に戻った。そういえば、さくらはこの部屋で何をしているのだろう。

「おい、さくら。」

ドアを叩くと、ドアが開いた。しかし、完全ではなく廊下を覗き込むように顔を出した。

「なに？」

「おまえ、ストーカーとかにあつてないか？」

「ストーカー？」

「ああ、誰に後をつけられていたり、してないか？」

「……なんで？」

「あるのか？」

「ないけど、なんで急に？」

「いや、なんか、今日、家の前でお前のこと聞いてきた奴がいたから。」

そういうなり、さくらはドアを半分開けた。といつても、中の様子はさくらの体で見えないが。

「それって、どんな人だった？ 男性？ 背は？ 顔は？」

「え、なんだよ、心当たりがあるのか？」

「いいから。どんな人だった？」

「え、えつと、男だよ。なんか、ひ弱そうな、オタクみたいな。めがねをかけていて、いまどき、すっかりオールバックだった。」

「あ、ああ。あの人か。なんだ……。」

さくらは逆にほっとしたように言った。

「知り合いなのか？」

オレは目を丸くした。

「うん。サクラの知り合いなの。」

「サクラって犬の？」

「そう。あの人、犬飼ってるんだよ。」

「……へえ。」

「ありがと心配してくれて。」

「あ、別に。」

オレはそう言つて、自分の部屋に戻った。ごろんとベツトに横になったが、なんだか、へんな感じだ。あの方は犬のことではなく、さくらのことを聞いた。犬のサクラの知り合いなら、なぜ、犬の事を聞かなかったのだろう。

「ま、オレには関係ないか。」

そのままオレは寝た。だが、翌日。東さんは学校には来なかった。その次の日もだ。

く東さんの休みく

学校内の昼ご飯中。海苔巻を食べながら、田中は言った。

「こないねえ、東さん。」

「メール送ってるんだけどねえ。返事が来ないの。」

近藤さんは心配そうだ。

「家の電話とかには、かけてみた？」

「かけたんだけど、娘は寝ていますってお母さんに言われたの。」

「そんなに重病なのか？」

「どうなんだろう。お見舞いに行ってみようかと思って。」

「ああ、いいかも。」

「あー、疲れたあ。」

やっぱりじゃんけんに負けて、ジュースを買いに行かされた、さくらが戻ってきた。

「あー、あたし、いちごー。」

「オレ、お茶。」

「あ、そうそう、さくらちゃんも行かない？」

亜紀が誘った。

「どこに？」

「理江のお見舞い。」

「お見舞い？」

「こいつはいいよ。お前、放課後またじいさまのところに行くんだろ？」

「うん。」

「じゃ、だめかあ。」

そして、放課後にぞろぞろと東さんの家まで出かけて行ったが。
「ごめんなさいね、会えないの。」

という、母親のインターホンごしの言葉で終わった。

「なんでだろう……。」

近藤さんはがっかりしたように言った。

「誘拐とか？」

「誘拐？」

田中の言葉に、全員が振り返った。

「だって、それなら、携帯にも出られないし、顔も出せない。」

「だって、お母さんは病気だって。」

と、亜紀は言う。

「けれどもしも誘拐とかだったら、情報は出せないだろう？」

「それは、そうだけど。」

「最後に会ったのって、さくらちゃんか？」

オレはクビを振った。

「いや、あいつは会ってないらしい。」

「へんねえ。すぐに追いかけていったのに。あの子、あの日はどこに行ったの？」

「雨の日以外はほとんど、毎日のようにじいさまの墓参りに出かけているよ。あとは犬の墓か。」

「はかぁー？もしかして、今日も？」

「ああ。」

「毎日ってすごいね。私なんか一年以上行った記憶がないけど。」

「俺も田舎にあるしなあ。」

お墓についてああでもない、こうでもないといわいわい話していた。

翌日。

東さんは登校してきた。

「理江！」

「大丈夫だった？風邪。」

「心配したんだぞ。」

「東さん！もう平気なの？」

「うん。もう平気。あの、さくらちゃんは？」

「さくら？あいつなら、さっきまでこの辺にいたんだけどなあ。」

「どうやら、廊下にいたのか、戻ってきた。」

「あ、理江。」

「さくら。ありがとう。」

東さんはさくらに微笑みかけた。さくらもちよつと笑った。

「なんだ？」

「何の話？」

「ひみつー。」

さくらはおどけて笑った。

「えー、何ー気になるー。」

「おしえなーい。」

オレは田中の言ったような誘拐じゃなくてよかったと思った。

「なんか、やせたね。」

近藤が言う。

「うん。ちよつと体を壊していたものだから。」

「家にもお見舞いに行っただよー。」

亜紀が言った。

「母から聞いたわ。わざわざありがとう。」

「ほら、一時間目、あら、東さん、もう元気になったの？」

入ってきた先生は言った。

「はい、大丈夫です。」

昼食時。誰もが弁当を出したり、パンを買いに行く中で、東さんは帰り仕度をしていた。「あれ、帰るの？」

「うん。まだ全快つてわけじゃないから。今日は午前中だけ。」

「そうなんだあ。」

「あの、さくらちゃん。玄関まで送ってくれない？」

「いいよ。」

「あ、私も。」

「ううん。律子はいいの。じゃあね。」

二人は教室から出て行った。

「なんか、理江、やつれたと思わない？」

「断られてしょんぼりとした近藤が言う。」

「風邪だったからだろう？」

「のんきに木村が言った。」

「馬鹿ねえ。風邪くらいで、あんなにやせないと思うよ。」

「うんうん、それになんて登校して一番にさくらちゃんのことを気にするの？」

「なんか、お礼言っていたよな。おまえ、なんか知っているか？」

「何でオレが？」

「お前、婚約者だろ。」

「だからなんだよ！」

「それもおかしいよな。普段、婚約者が何をしているのか、お前知っているのか？」

「しらねえ。」

「オレは正直に答えた。」

「なんでだよ！」

「婚約する気がねえからだろうが。」

「でもさあ、理江、さくらちゃんが来てから、なんか変だよ。」

「うん。」

田中は何か思い出したように言った。

「変といえばさあ、うちの校長もだよな。」

「校長？なんでー？」

「いつだったかなあ、影から何か見ているからさ、何見ているのかと俺も覗いてみたら、その目線の先に、さくらちゃんがいたんだよ。」

「あいつが？」

「変だよ、それ。恋？」

「だって、校長って六十近くなかったか？」

「恋に年齢は関係ありません。」

やっぱりうつとりするように亜紀が言った。

「あんな、じいさんが影からこそそそ見てたりするかー？変態だろう。」

「変態の校長かあ……。」

なんだか、食欲が落ちるといふものだ。しかし、木村の言つとおり、仮にも一応婚約しているというのに、何も知らないというのはどうだろうと、オレは考え始めていた。

弁護士の高藤氏

「弁護士の高藤氏」

「ここかあ。」

オレが見上げている高層ビルの三十三階に弁護士の高藤氏がいる。

「アポなしで会ってくれるのかな。」

ぶつぶつ呟きながら、オレは入っていった。制服姿のままで、入るのはなぜかためらわれたが仕方がない。エレベーターで上がるとすぐに、そこに受付があつたが、受付以外、ドアがあっちこっちにあるだけというのが気になる。

「あの、オレ、遠藤って言いますけど、高藤さんいますか？ 弁護士
の。」

「お約束は？」

「していません。」

「少々お待ちください。」

そういつて受付のお姉さんは、どこかに電話を入れた。オレはその間、きよろきよろと見回した。

「どうぞ、三番のドアへ。」

「……え、どれが三番なんですか？」

「そこです。」

「どうも。」

なるほど、ドアの前に立つとうつすらと三の文字が見える。オレは一応、ノックしてみた。コンコン。

「どうぞ。」

「失礼します。」

中に入ってみると、その部屋には高藤氏の机しかなかった。他に本棚にソファがちょこんとあるだけだった。

「やあ。どうしましたか？こんなところまで。呼んでくだされば、こちらから伺いましたのに。どうぞ。コーヒーでいいですか？」

弁護士の海藤氏はにこやかに微笑んだ。

「はい。あ、あの、ちょっとお聞きしたいことがあって。」

「なんでしょう？」

「あの、じいさまからさくらと婚約させるようにって書類をあずかつたんですよね？」

「そうですね。あなたが印を押したあの紙がそうです。コピーを渡しましたよね？」

「ええ。あるんですけど、あれにはさくらという名前しかかれていないんですけど、苗字とか住んでいたところとかってというのはわからないんですか？」

「わかつてはいますが、教えることはできません。」

おだやかとはいえ、はつきりと言いつた。温厚そうな顔をしているが、あのじいさまが気に入ったのだから、敏腕なのだろう。

「じゃ、あのさくらが、紙にかかれていた、さくらだって、どうやって証明するんですか？」「あなたさまが遺言どおりに結婚された場合、もう一通、遺言書があげられます。」

「もう一通？」

「はい。そこにさくらさんのことが書かれています。苗字、年齢は同じで、ほかにも住んでいた場所や学歴など。全てが書かれています。」

「だけど、お見合いとかでも、もう少しは教えてくれるんじゃないの？」

「なんとか、食い下がってみる。」

「……。私は職務上、申し上げられませんが、柊さんに聞いてみてはいかがですか？」

「柊に？」

「ええ。」

そつえば、さくらを連れてきたのは柊だった。

「ありがとうございました。」

「あ、遠藤さん、これ、今月分、いま渡してもいいですか？」
五十万だった。

「はい。」

受け取ってから聞いてみた。

「あの、このお金がどこから出てきているんですか？」

「あなたのおじいさまからですよ、もちろん。」

「だけど、遺産とか、みんなに渡したんじゃないの？」

「遺言書にはかかれていませんが、これはさくらさんよの遺産です。」

「……じゃ、本当はさくらが受け取るものだということですか？」

「ええ。でも、彼女は受け取りを拒否。そのお金は遠藤家に渡すことによって、代わりに屋敷に住んでいるのです。彼女と結婚すれば、そのさくらさんよの遺産も全部、あなたの手に入りますよ。」

「……どうも。忙しい中を。」

「いえいえ。」

弁護士はにこやかに微笑んだ。

はつきり申し上げて。でかい屋敷に住んでいるからといって、現金をたくさん持ち歩くことになっているなどとはいえない。それも高校生で五十万が大金であるという一般的常識もオレは持ち合わせていた。当然のように帰りは緊張し、家に着く頃には肩がこっていた。「おかえりー。」

「ああ、ただいまぁー……。」

「なんか、疲れてる？ 今日、カレーだよ？」

「あーわかった、着替えてから行く。」

オレはとりあえず自分の部屋に戻って、着替えて下に降りていくともうみんなが夕食を食べ終わった後だった。

「勇太、遅かったから先に食べたよ。」

「ああ、いいよ。」

「はい。」

さくらがカレーを差し出した。

「ども。ん？なんで二個あるんだ？」

「私のぶん。」

「まだ食べてなかったのか？」

「だって、勇太、返ってこないから。」

「先、食べてりゃいいのに。」

「うん。今度からそうする。」

そして、もくもくと食べ始めた。

「なあ。」

「ん？」

「今日、東さん、お前に何の用だったんだ？」

「……気になる？」

「ちよつと。」

「お、素直だ。そうだねえ、勇太が大好きな東さんだもんねえ。」

「な、何いってんの？」

ふいをつかれてか、オレは顔が真っ赤になるのがわかった。

「なに、大きな声を出しているの？」

「ばあさまが顔を出した。」

「あのねえ……。」

さくらが話しそうになるのを慌てて、遮った。

「黙ってる！ごちそうさま！」

そして、その場から退散した。まったく女の勘というものは怖い。
結局、東さんがさくらに何のようだったか、聞けずじまい終わった。

柊に問う

「柊に問う」

翌日。いつもよりも早くに起きて、柊に聞いてみた。いつもは外見を拭いているが、今日が雨のせいか、車の中の窓を拭いていた。柊はじいさまの専属の運転手だったが、いまでは父さんの運転手だ。車庫の中とはいえ、声が響く。

「さくらさんのことですか？」

「うん。じいさまが亡くなったときに連れてきたのは、柊だろう。どこに迎えに行ったのかなって思ってた。」

「公園ですよ。」

「公園？」

「ええ。木見外公園ですよ。」

「なんで、あそこに？」

「いつも、会長とあそこでお会いしていましたから。いらっしやるなら、あそこだろうと思いますよ。」

「そうなの？」

「ええ。」

「他にさくらのことで知っていることない？」

「そうですね……。いつだったか、会長が「まさか、あの子にこんなところで会うとは……。」と、言っていたことがありましたね。」

「じゃ、もともと知りあいだったってこと？」

「さあ？どうでしょう。あ、おはようございます。」

柊はやってきた父さんに向かって言った。

「おはよう。なんだ、勇太、朝から珍しいじゃないか。」

「うん、ちょっとね。いつてらっしやい。」

「ああ、行ってくる。」

そして、車はゆつくりと走り出していった。

「公園かあ。」

たしかに、公園はある。しかし、登校のほうにはないせいかわかり遠のいていた。用もないのに、高校生が公園でうろろうしていたら、怪しいものだ。

～校長再び～

オレが登校するまでに雨はすっかり上がっていたが、折りたたみの傘だけはさくらに持たされた。オレはこの一ヶ月ですっかりさくらと一緒に登校するのにも慣れた。もう婚約者がどうだとか、噂する者もない。東さんは体調が万全ではないからと、メールを近藤さんに送って休んでいた。

そして、終わりのチャイムとともに、さくらは先に帰る。オレは今日は部活がないから追いかけて、一緒に帰ろうとしていたが、靴を履いて外に出たとたんに校長先生に引き止められた。

「遠藤君。」

「はい。」

「ちよつといいかな？」

「はあ。」

正面きってダメとはいえまい。オレはまた校舎内に戻ることになった。何度来ても校長室は緊張する。

「あのね、君の婚約者のことなんだ。」

「さくらですか？」

「そう。……その、結婚は卒業してからかな？」

「えーと。」

どう説明しろというのだろう。

「わかりません。」

その返事に校長はギョツとしたようだった。

「え、じゃ、卒業前に結婚するのかい？」

「い、いえ、それはありませんよ。」

「あ、ああ、そう。」

あきらかに校長はほつとしたようだった。

「あの、なんでさくらのこと、そんなに気にするんですか？」

「ん？ああ、いや。ちよつとね。あ、じゃ、結婚の話は別に進んでないんだね？」

「ええ、いまのところは。」

「そうか。わざわざ引き止めて悪かったね。気をつけて帰ってくれたまえ。」

「あ、はい……。」

オレは首をかしげながら、校長室を出て行った。なんで校長はあんなにさくらのことを気にするのだろう？

〳公園へ〵

オレはそのまま電車に乗り、自分の降りる駅で降りて、そのまま直接公園に向かった。これだけ明るければ、高校生がうろうろしていても怪しいことはあるまい。

木見外公園というのは、そんなに大きな公園ではないが、別に小さくもない。ブランコに、シーソー、滑り台に、砂場。鉄棒とジャングルジムがある。小さい頃はそれだけあれば十分な遊び場だった。しかし。

「こんなサイズだったかなあ？」

大きくなってから改めて訪れてみると、かなり印象が違う。はっきり言って大きい場所とはいえない気がする。

「あ。」

さくらを公園の端っこのベンチで見つけた。しかし、よく見ると、

隣に誰かいる。オレは、そつと後ろから近づいてみる気になった。公園の出入り口は二箇所だ。しかし、それ以外の場所からでも、木の間を通っていけば、いけないことはないのだ。

まずは覗き込んだ。そして、わかった。さくらの隣にいたのは、オレの家の周りをうろろろしていた、あのオールバックの奴だった。しかし、さくらが迷惑がっているというようなことはないようだ。それよりも二人してなにやらノート型のパソコンを覗き込んでなにが話しているようだ。

しかし、ここからでは声が聞こえない。オレはそつと音を立てないように近づいていった。が。忘れていた。今日、朝からかなりの雨が降ったことを。ついでに、ちよつとした下り斜面になっていたことを。すべった。

「う、うわぁ。」

「誰？」

するどくさくらが振り返った。

「あ。」

「あ、いや、その。」

「勇太！なにしてるのよ！」

「いや、たまたま見かけたもんだから。」

「たまたま？」

パソコンを持った男は疑わしそうに言った。

「また、後ろから脅かそうと思ったんでしょ。」

「う、まあ、そんなところ。」

まさか、話を盗み聞きしようと思っていたとはいえない。オレはぐしょぐしょになった制服を脱いだ。

「あーあ。」

さくらが言った。

「クリーニングだな。」

オレはため息混じりにつた。

「んー。そろそろ衣替えだし、ちようどといえば、そうかもね。」

「ところで、あんた誰？」

オレはパソコンを持つている男に聞いた。

「僕は……。」

「ああ、サクラの知り合いよ。犬のね。」

「前もそう言っていたけど本当か？」

「証拠を見せよう。」

男はパソコンを見せた。そこには。

「じいさま！に、サクラじゃないか。まだ生きていた頃のか？」

「そうです。」

「なんで、なんであんたが、これ持つてるんだ？」

「僕が撮った写真だ。それをパソコンに入れているので。」

「なんで……。」

「サクラを捨てたのは僕だった。僕が高校生の頃に、友人から子犬をもらって家に帰ったら、急に母親がアレルギーになって、それでずっと誰かが拾ってくれるのをこの公園の隅で見えた。そしたら、このじいさんが孫と一緒に来たんだ。たぶん小学校入学前かなあ。

その孫が見つけて、拾っていつてくれた。僕は何度目かの散歩の時にじいさんに声をかけたんだ。サクラのことを聞きたくて。そして、会わせてあげようって。なんどか、ここで話したんだ。」

「その孫って、もしかしてオレ？」

「そうみたいですな。」

「やっぱり。……本当にサクラの知り合いだったのか。」

「信じてなかったの？」

「さくらは頬を膨らませた。

「いや、だって。家まで来るから。」

「あ、すいません。この間、サクラの墓へ行ったら女の子が掃除していたから。それで。」

「墓の場所まで知っているの？」

「オレは目を丸くした。

「ええ。いつだったか、一緒に歩いているときに、散歩コースの気

の多いところで、じいさんがここに墓を立てたいんだって言うていたことがあるから。それで。」

「だけど、小学生の頃まではオレも一緒に散歩していたぞ。一度も会ったことなんかないじゃないか。」

「ありますよ、二回くらい。」

「え。」

「覚えてないんだ？」

「普通は小学生の前にことなんてはつきりとは覚えていませんよ。あなたじゃないんですから。」

「え、オレが小学校前って時に、高校生ってことはいま、30くらい？」

「越えましたよ。」

「だけど、サクラが死んだのはもつと前なのに。」

「日本にいなかったんです。墓を見つけて、やっと知って。じいさんが亡くなったことも、最近知ったんですよ。」

「そつか。じいさまの墓には行った？」

「ええ。人間のさくらさんの案内で。あ、こんな時間。じゃ、僕はこれで。さくらさん、また今度に。」

「はい。」

男はさくらににこやかに微笑んで、ついでにオレに会釈だけして帰っていった。

「あー、まだ雨が降りそうだねえ。」

空を見上げて、さくらが言った。

「そうだなあ……。」

「帰ろ。」

「うん。ところで、さくら。」

「なに？」

「いつあんな奴と知り合いになったんだ？じいさまの知り合いならオレにも教えてくれないじゃないか。」

「だって、家で食事以外で勇太が居間にいたことなんてある？」

そういわれてみると、なんだか、自分の部屋にばかりいた気がする。

「ないかも。」

「かもじゃなくて、ない。」

「そうか？」

「そうだよ。」

どうやらその言い合いもオレの負けのような気がしてきている。

携帯がなった。

「はい。あ、いえ。彼女と話しましたが、邪魔が入りまして。ええ。大丈夫です。ごまかしましたから。はい、はい、ええ。それじゃ。」

オールバックの男はにんまりと笑った。

校長 再び

「校長再び」

オレが登校するまでに雨はすっかり上がっていたが、折りたたみの傘だけはさくらに持たされた。オレはこの一ヶ月ですっかりさくらと一緒に登校するのにも慣れた。もう婚約者がどうだとか、噂する者もない。東さんは体調が万全ではないからと、メールを近藤さんに送って休んでいた。

そして、終わりのチャイムとともに、さくらは先に帰る。オレは、今日は部活がないから追いかけて、一緒に帰ろうとしていたが、靴を履いて外に出たとたんに校長先生に引き止められた。

「遠藤君。」

「はい。」

「ちよつといいかな？」

「はあ。」

正面きつてダメとはいえまい。オレはまた校舎内に戻ることになった。何度来ても校長室は緊張する。

「あのね、君の婚約者のことなんだ。」

「さくらですか？」

「そう。……その、結婚は卒業してからかな？」

「えーと。」

どう説明しろというのだろう。

「わかりません。」

その返事に校長はギョツとしたようだった。

「え、じゃ、卒業前に結婚するのかい？」

「い、いえ、それはありませんよ。」

「あ、ああ、そう。」

あきらかに校長はほっとしたようだった。

「あの、なんでさくらのこと、そんなに気にするんですか？」

「ん？ああ、いや。ちょっとね。あ、じゃ、結婚の話は別に進んでないんだね？」

「ええ、いまのところは。」

「そうか。わざわざ引き止めて悪かったね。気をつけて帰ってくれたまえ。」

「あ、はい……。」

オレは首をかしげながら、校長室を出て行った。なんで校長はあんなにさくらのことを気にするのだろう？

公園へ

うろしていても怪しいことはあるまい。

木見外公園というのは、そんなに大きな公園ではないが、別に小さくもない。ブランコに、シーソー、滑り台に、砂場。鉄棒とジャングルジムがある。小さい頃はそれだけあれば十分な遊び場だった。しかし。

「こんなサイズだったかなあ？」

大きくなってから改めて訪れてみると、かなり印象が違う。はつきり言って大きい場所とはいえない気がする。

「あ。」

さくらを公園の端っこのベンチで見つけた。しかし、よく見ると、隣に誰かいる。オレは、そつと後ろから近づいてみる気になった。公園の出入り口は二箇所だ。しかし、それ以外の場所からでも、木の間を通っていけば、いけないことはないのだ。

まずは覗き込んだ。そして、わかった。さくらの隣にいたのは、オレの家の周りをうろついていた、あのオールバックの奴だった。しかし、さくらが迷惑がっているというようなことはないようだ。それよりも二人してなにやらノート型のパソコンを覗き込んでなに話しているようだ。

しかし、ここからでは声が聞こえない。オレはそつと音を立てないように近づいていった。が。忘れていた。今日、朝からかなりの雨が降ったことを。ついでに、ちょっとした下り斜面になっていたことを。すべった。

「う、うわあ。」

「誰？」

するどくさくらが振り返った。

「あ。」

「あ、いや、その。」

「勇太！なにしてるのよ！」

「いや、たまたま見かけたもんだから。」

「たまたま？」

パソコンを持った男は疑わしそうに言った。

「また、後ろから脅かそうと思ったんでしょ。」

「う、まあ、そんなところ。」

まさか、話を盗み聞きしようと思っていたとはいえない。オレはぐしょぐしょになった制服を脱いだ。

「あーあ。」

さくらが言った。

「クリーニングだな。」

オレはため息混じりに言った。

「んー。そろそろ衣変えだし、ちょうどといえば、そうかもね。」

「ところで、あんた誰？」

オレはパソコンを持っている男に聞いた。

「僕は……。」

「ああ、サクラの知り合いよ。犬のね。」

「前もそう言っていたけど本当か？」

「証拠を見せよう。」

男はパソコンを見せた。そこには。

「じいさま！に、サクラじゃないか。まだ生きていた頃のか？」

「そうです。」

「なんで、なんであんたが、これ持ってるんだ？」

「僕が撮った写真だ。それをパソコンに入れているので。」

「なんで……。」

「サクラを捨てたのは僕だった。僕が高校生の頃に、友人から子犬をもらって家に帰ったら、急に母親がアレルギーになって、それでずっと誰かが拾ってくれるのをこの公園の隅で見っていました。そして、このじいさんが孫と一緒に来たんだ。たぶん小学校入学前かなあ。その孫が見つけて、拾っていつてくれた。僕は何度目かの散

歩の時にじいさんに声をかけたんだ。サクラのことを聞きたくて。そしたら、会わせてあげようって。なんどか、ここで話したんだ。」

「その孫って、もしかしてオレ？」

「そうみたいです。」

「やっぱり。……本当にサクラの知り合いだったのか。」

「信じてなかったの？」

「さくらが頬を膨らませた。」

「いや、だって。家まで来るから。」

「あ、すいません。この間、サクラの墓へ行ったら女の子が掃除していたから。それで。」

「墓の場所まで知っているの？」

「オレは目を丸くした。」

「ええ。いつだったか、一緒に歩いているときに、散歩コースの気の多いところで、じいさんがここに墓を立てたいんだって言っていたことがあるから。それで。」

「だけど、小学生の頃まではオレも一緒に散歩していたぞ。一度も会ったことなんかないじゃないか。」

「ありますよ、二回くらい。」

「え。」

「覚えてないんだ？」

「普通は小学生の前にことなんてはつきりとは覚えていませんよ。あなたじゃないんですから。」

「え、オレが小学校前って時に、高校生ってことはいま、30くらい？」

「越えましたよ。」

「男性はしみじみと言った。」

「だけど、サクラが死んだのはもっと前なのに。」

「日本にいなかったんです。墓を見つけて、やっと知って。じいさんが亡くなったことも、最近知ったんですよ。」

「そっか。じいさまの墓には行った？」

「ええ。人間のさくらのさんの案内で。あ、こんな時間。じゃ、僕はこれで。さくらさん、また今度に。」

「はい。」

男はさくらににこやかに微笑んで、ついでにオレに会釈だけして帰っていった。

「あー、まだ雨が降りそうだねえ。」

空を見上げて、さくらが言った。

「そうだなあ……。」

「帰ろ。」

「うん。ところで、さくら。」

「なに？」

「いつあんな奴と知り合いになったんだ？じいさまの知り合いならオレにも教えてくれてもいいじゃないか。」

「だって、家で食事以外で勇太が居間にいたことなんてある？」

そういわれてみると、なんだか、自分の部屋にばかりいた気がする。

「ないかも。」

「かもじゃなくて、ない。」

「そうか？」

「そうだよ。」

どうやらその言い合いもオレの負けのような気がしてきている。

携帯が音を鳴らして鳴った。

「はい。あ、いえ。彼女と話しましたが、邪魔が入りました。ええ。大丈夫です。ごまかしましたから。はい、はい、ええ。それじゃ。」

オールバックの男はにんまりと笑った。

雨の日の出来事

「雨の日の出来事」

「あー雨だ。」

さくらは勇太の方をみて言った。玄関の近くにある、傘置き場を見つめている。

「勇太郎の傘はどれ？」

「じいさまの？でかいぞ。」

「いいよ。」

「んじゃこれだ。」

オレはその傘を差し出したが、さすがにそれは母の手によって止められた。

「待ちなさい、いくらなんでもおかしいわ。私を持って行きなさい。」

「ありがとう、由里さん。借りますね。」

そう言つて、さくらは母のオレンジの傘を指して家を出た。

「すごい雨だねえ。」

「そうだな。」

「勇太郎は雨が嫌いだったよね。」

「初耳だ。」

「そうなの？知らなかったの？」

「ああ。知らない。」

そう言つて、オレはふと思った。あれだけ長く一緒に暮らしてきたけれど、自分はどれだけじいさまのことを知っているのだろうか。と無意識に聞いていた。

「さくらのじいさんはどんな人だ？」

さくらの足が止まった。オレは振り返つてみた。

「どうした？」

「うっん。」

さくらはまた歩き出した。

しばらくしてポツンと言った。

「会わないうちに亡くなったの。」

「じいさんが？」

「そう。だからどんな人だったのかわからないの。勇太はいいね。」

「なにが？」

「いっぱい思い出がある。」

さくらはそう言って駆け出した。

「駅まで競争！」

オレは慌てて走ったが、先を走るさくらの後ろ姿を見ながら、いつもあたりまえのようにいたじいさまの笑顔を思い浮かべていた。

翌日。

「はい、これ。」

ゆりは可愛い傘を差し出して見せた。

「傘？」

「そうよ。さくらさんの分。これから雨が多くなるだろうから。」

さくらは感激の面持ちで笑った。

「ありがとう、ゆりさん。お代は……。」

「ああ、いいのよ。この間の本のお礼だから。さ、遅れるわよ。」

「いつてきます。」

つられて、オレも言った。

「行ってくる。」

二人して家を出た。

「本って？」

「ゆりさんが探していた本がネットにあったから買ったの。その話。」

「へえ。本なんか読んでいるところ、見たことないけどな。」

「そう？よく読んでいるよ。居間にある本棚の本、増えていってい

るでしょ。あれは、由里さんが読んでる本なんだよ。」

「へえ……。」

オレはそう、返事をしたが、実際には、居間に本棚があるかどうかさえも思い出せなかった……。

兄の帰宅

く兄の帰宅く

ある日の帰宅時。

「ただいまー。」

「ただいまー。」

「あら、一緒だったの？」

オレたちの声に、ばあさまが出てきた。

「うん。そこで会ったのよ。どなたか、いらしてる？」

さくらがへんな日本語で言った。

「なんで？」

「靴が。」

確かに、見慣れない靴が置いてある。

「ええ。勇一がね。」

「兄さんが？」

居間に行くと、たしかに一番上の兄がソファに座っていた。

「やあ、勇太。それに婚約者殿。元気か？」

勇一は手をひらひらさせていった。

「おかげさまで。」

さくらは、にこやかに言った。

「うん、まあね。どうしたのさ、突然。」

「なんだ、急にきたら悪いのか？俺の家でもあるんだぞ。」

「まあ、そうだけど。」

「ハイハイ、話は後にして着替えてらっしゃい。さくらさん、夕食作るの手伝ってくださいね。」

「はい。」

とりあえず、服を着替えに階段を上がっていった。

「なにしに來たんだろうなあ、兄貴。」

「きつと勇太の顔を見に来たのよ。」

さくらはのんきにそんなことを言った。

「いまさらか？」

話は途切れてそれぞれの部屋に入っていった。

「うまい。さくらちゃん、いいお嫁さんになれるねえ。」

夕食を食べながら、勇一は微笑んだ。

「それ、私も手伝いましたけど、梅ちゃんが作ったのよ。」

さすがに、勇一も目を丸くした。

「うそ。ばあちゃん、料理できるんだ！」

「勇一！」

母親がたしなめたが、遅かった。

「ほほほほ。できますよ。あなたたちのお父さんに食べさせていたんですからね。今は、由里さんと交代で、さくらさんに教えているところなのよ。」

「へえ。お前、知っていたか？」

「うん。習っているのは知っていた。けど、やっぱり、ばあさまが台所に立っているのを見たときはびっくりした。」

勇太は正直に言った。

「ほほほほ。たまに帰ってくると、なにか発見があっていいわね。これからもちょこちょこ帰ってらっしゃいよ。」

ばあさまはにこかにそう言った。

食後。

ばあさまは部屋へ戻り、母さんとさくらは片付けを始めた。

オレと兄貴は居間で食後のコーヒーを飲みながら、くつろいでいると、さくらが台所にいるのを確認してから勇一はしゃべりだした。

「おい。」

「なに？」

「婚約のことはどうなってるんだ？」

「どうって？どうにもなってないよ。」

勇一は目を丸くした。

「どおにも？まさか、一緒に学校へ行っているだけなのか？ほかに
は？」

「ほかって。ほかに何があるんだよ。別に、好きだとかそういうわけじゃないし。母さんたちだっているんだから、なにもないだろう、普通。」

「そういう意味じゃない。身元調査の問題だ。したのか？」

「んー。少し？」

「少しって……お前はのんきだなあ……。」

勇一はあきれたように、またはそれが微笑ましいかのように穏やかに笑った。

「なにが？」

「お前、仮にも自分の婚約者だぞ？何も知らないとは……。」

「だって誰も教えてくれないんだよ。別に婚約っていつでも、とくになにかあるわけじゃないみたいだし。」

「教えてくれないんだもん、じゃない。そんなことくらい、自分で調べるよ。月に50万ももらってるんだろう？」

「そうだけどあの金はさくらがもらうはずの金なんだ。勝手に使ったらずいだよ。」

「それはどこからの情報なんだ？」

「弁護士の高藤氏だよ。一応、聞いてみたんだ。」

「じゃ、もらった金は全然使ってないのか？」

「いや、本人の定期代とかには使った。」

「だけ？」

「だけ。」

文句があるのかと言わんばかりに勇太は口を結んだ。

「高藤市から聞いたのはそれだけか？」

「それ以外は教えられませんでしたっていわれたんだよ。」

勇太は顔をしかめてみせた。反対に勇一はにまにま笑い出した。

「そうか……ふーん……。あの弁護士も、じいさんに仕えて長いか

「らなあ。」

「なんだよ。なにかさくらのこと知っているのか？」

「まあな。いくら、じいさんが連れてきたからって急に婚約者はないだろ？」

「で？で？」

勇一はゆうたの期待にみちたような顔を見ながら優越感に浸っていた。こんなに弟が懐いてきたのは子供だったころ以来だからだろうか。急に意地悪をしたくなった。

「ただで教えてもつまらん。」

「えー。」

勇太は顔をしかめた。

「ヒントをやる。」

「なに？」

「いままでに食べた夕食のレパートリーを考えてみる。共通点を探せ。そのあとでどうしてそうなのかを考える。」

「だけ？」

「だけだ。脳は使わないとおとろえるぞ。」

「……わかったよ……。」

「よしよし。じゃ、俺はばあさんとさくらちゃんに挨拶してから帰る。」

兄貴はそうして、まずはばあさまの部屋へと去っていった。勇太はゆっくりと考え出した。いままでに食べた夕食？煮物、スープ、カレー、サラダ……どんな共通点があるというのだろうか？

「勇太。」

「ん？」

「お兄さんは？」

「ああ、ばあさまに挨拶してくるって。すぐに、戻ってくるんじゃないか？あ、ほら。」

言葉通り、ちょうど兄貴が戻ってきたところだった。

「お兄さん。」

「やあ、さくらちゃん。」

「帰るんですか？」

「そう。玄関まで送ってくれる？」

「はい。」

「じゃ、勇太、またな。」

「んー。」

オレは、そっちのほうを見ずに手を振った。そして、さくらがしばらくしてから玄関から戻ってきたことにも気がつかなかった。

二番目の兄

く二番目の兄く

「え？また？」

学校から帰宅するなり、オレは言った。

「お兄さん、来てるんですか？」

一緒に帰ってきていたさくらも言った。

「今日は、勇次だよ。どうしたんだろっねえ。続けて兄弟してくるなんて。まったく。同じ日にくればいいものを……。」

ばあさまはぶちぶちと言った。

「よお。おかえり、お二人さん。」

昨日、勇一がくつろいでいたソファで、今日は勇次がくつろいでいた。

「どうしたのさ、急に。」

「いいじゃないか、たまには。昨日、兄貴が来たんだって？」

「そうなんだ。」

「ふーん。」

「ハイハイ、先に着替えてらっしゃい。」

「はい。」

さくらは素直に返事をして、部屋を出て行った。オレも出て行こうとすると、勇次が言った。

「おい、勇太。」

「なに？さくらとのことだったなら、なにも変わってないよ。」

「なんだ？兄貴も昨日、聞いたのか？」

「うん。」

「さすがだな。」

勇次は苦笑いをした。

「じゃ、着替えてくる。」

オレは部屋へと戻った。兄、二人してなんだというのだろう。

「ゆつくり、食べなさい。」

そう、いつも母親に言われていたように、今日も勇次は言われていた。

「いやー。ついね。うまかった。ごちそうさま。」

勇次は満足のため息をついた。そして、しみじみと言った。

「やっぱり、和食はいいねえ。」

「よかったです、おいしくて。」

さくらはにこやかに笑った。

食後。

「あ、コーヒー？ いらない。苦いんだもん。お茶くれる？」

「はい。」

お茶を入りに台所に行ったさくらのあとを追いかけるように勇次は追いかけていった。

「ただいまー。」

「あ、父さん。」

「はいはい。」

ばあさまと母さんは父さんを迎えに行った。オレは、コーヒーが無いからと台所に向かった。

「おい、さくらー。……なに、やってんの？」

そこでは、勇次がさくらの腕をつかんでいた。

「あ。いえ、もうすぐ勇太の誕生日だから、プレゼントの内容交換を。同じものだとならないから。ね？」

さくらは慌てたように言った。

「ん？ ああ、そうだな。」

慌てて勇次もそう言ったが、嘘のようだ。

「……父さん、帰ってきたぞ。」

「ん？ じゃ、俺は父さんに挨拶だけして、帰る。」

そう行きかけて、勇次は振り返って言った。

「あ、勇太。あんまり長い間、なにもないようだったら、俺がもらうからな。」

「兄さん……。」

「じゃなー。」

勇次は手をひらひらさせて去っていった。

「勇太、コーヒー、おかわり？」

「ん？ああ、そう、頼む。」

「はい。」

さくらはコーヒーを入れたした。

「なあ、さくら。」

「はい？」

「兄さん、なんだって？本当に、口説いていたの？」

「まさか。あれは冗談ですよ。彼女がいるんですよ。」

「嘘。マジ？」

「ええ。だから大丈夫ですよ。」

さくらはにこやかに笑った。そういうことを聞きたいのではないのだが、さくらの顔を見ていて、まあ、なんだか平気なような気がしてきたので、オレも笑った。

さくら消失

「さくら消失」

「あちいな。」

「夏が近いもんねえ……。」

さくらは少し高くなった空を見上げた。

こんなことをいうと乙女チックだと亜紀に笑われそうだが、まるでその姿は空に溶け込み

そうだった。

「夏服にしないのか？」

「ん？ああ。まだ買ってないの。」

「買ってない？金ならあるぞ。」

「わかってるけど、あと一週間たったら買う。」

「なんだ、そりゃ。」

駅までの道でそんな話をしながらのんびり歩いて行った。

「よう。」

「やあ。」

「おはよう、木村君。今日は部活ないの？」

「うん。もうすぐ試合だけど、今日は監督に孫が生まれた記念とかで休みなんだ。」

「なんだ、そりゃ。」

「亜紀さんは？」

「あいつは今日も走っているさ。」

「いいよね、健康的で。」

「さくらちゃんもやれば？」

「うーん……。」

さくらはちょっと困ったように笑った。

いつもの風景だった。兄たちの訪問以降も、とくになにかが大きく

変わったわけでもなく、毎日が続いていた。

しかしそれは突然にきた。学校が終わって、外に出ると、なにやら生徒たちがひそひそと話している。彼らの視線の先には黒い塊があった。大きな車だ。まるで、どこかの国の映画スターでも出てきそうな感じた。

他の子の情報によると、その日の授業が、終わる頃、そこに車が来ていたそうだ。みんなは、誰か有名人でも出てくるのではないかと見ていたそうだ。

すると、ドアが開き、中から男性が現れた。きちっとしたスーツ姿が似合いすぎていた。その男は、さくらのところへやってくると、言った。

「さくらさん、来てください。緊急事態です。」

その男は丁寧だがかなり威厳のある声で言った。

さくらはなぜか青ざめた顔をした。思わず声をかけたほどだ。

「さくら、大丈夫か？」

「うん。勇太、私少しの間留守にするね。みんなに伝えておいて。」

「おい。」

突然、俺は口をさくらにふさがれた。キスされたようだ。なにやら外野ではきやあきやあ言っていたが、あまりのことにオレの視界はちかちかした。

呆然としている間に車は走り出した。

それから一週間がたった。

「まだ連絡こないのかよ。」

田中があきれたように言った。

「あーふられたね。」

亜紀も容赦なく言う。

「どこへ行ったのかもわからんとは亭主失格だな。」

「亭主じゃねえよ！」

「でも普通連絡くらいあってもいいよね。」

近藤まで言い出した。

「だよなあ。」

「そんなことをいわれても……。」

オレは溜め息をついた。

とにかくこの一週間、家でもせめられっ放しだった。とくにばあさまにだ。

「そんな素姓もわからん奴にあの子を取られたんかつ！」

普段のばあさまからは想像できないほどの怖さだった。最初の三日は怒り、そのあとは泣

き出し、昨日にはすっかり落ち込んでいた。

しかし、他の誰かにさくらのことを聞こうにも、弁護士の高藤氏は出張でつかまらず、柊は父さんに着いて外国へ行つて、帰ったら話すと言った。それを待てずに校長に聞こうとしたら、彼は学会とやらで北へ行っており、公園に行つてもオタクな男もいなかった。

「連絡先とか素姓とか誰も知らないの？」

亜紀が言つたときだった。

東さんが急に言い出した。

「あのね。彼女、どこかのお嬢様なんじゃないかな。」

「なんで？」

「さくらちゃんが？」

「うん。あのね、長く休んでいた時があつたでしょう？」

「ああ、風邪で。」

「ううん。あれ、風邪じゃなくて、誘拐だったの。」

「……。」

あまりのあつさりした言い方に誰もが言葉を失った。

「まじ？」

そんな可能性もあるとあの時出だしたのは、木村だったのに、最初に聞き消したのも木村だった。

「うん。あのとき、私はさくらちゃんを追いかけて、おじいさんのお墓のところまで行つたの。そしたら、さくらちゃん、誰かと話を

していたの。」

「誰と？」

亜紀が聞いたが、東さんは首を振った。

「知らない人だった。でも、なんだか、声をかけちゃいけないような気がして、ずっと見ていたら、急に後ろから口をふさがれたの。」

「それで。」

「気がついたら、三日も経っていて、そこにさくらちゃんがいたの。横に、警察の関係者がいたの。」

「なんで、さくらが……。」

「よくわからないんだけど、とにかく、このことは口外しないようにって、言われて。親たちも黙っているように言っし、なにかあったんじゃないかって。」

「なにかって、圧力みたいなものがってこと？」

近藤が言う。

「それをさくらがかけたっていうのか？」

東さんはまた首を振った。

「本当によくはわからない。さくらちゃんが、道端に捨てられていた私を発見してくれたことになっているんだけど、けど、まだ、私の視界がぼんやりしている時に、さくらちゃんと、警察の人たちが何か話しているのを見たの。」

「さくらが……。」

「でも、ちゃんと目が冷めたら、何事もないような会話をしていた。」

「夢だってことは？」

木村が聞く。

「ありうるの。だからさくらちゃんには言わなかった。でも、あの車、墓場で見たものによく似ていたの。」

「さくらが東さんを連れ去る理由はないだろう。」

「だから、間違えたんじゃないかな。あんなお墓に女の子がいるなんて、普通思わないでしょ。」

「さくらを誘拐しようとした……。」

「でも今回、顔、青ざめていたけど、自分で乗っていったよね。」

「うん。あのとき、あの運転手、緊急事態だつて言っていたよな。」

「誰か、さくらちゃんのことを調べている人はいないの？ 仮にも、遠藤家の嫁なのに。」

亜紀がいった。

そこまで言われて思い出したのは兄たちだった。

兄たちの調べ

「兄たちの調べ」

翌日。

兄たちはばあさまの「来ないと、遺産はビター文もやらないよ!」という、脅しとばあさまの迫力に負けて、やってきた。

「いなくなつたあ?」

兄たちも知らなかつたようで、驚いたように言った。

「え、でも自分でいなくなつたなら、出て行つただけだろ?」

「連絡もよこさないでよ?」

「あんたたち、さくらについて知っていることを言いな!」

ばあさまに脅されてか、兄たちしぶしぶと話をしだした。

「わかつたよ。」

その言葉に、みんなの視線が一気に勇一に注がれた。さすがに少々たじろいだようだ。

「まあな。一応、三男とはいえ嫁に来る相手のことを調べないわけにはいかないかなと。ちよつとね。」

「今までに食べた夕食の共通点を考えろつて言っていたよな?」

「ああ。」

「結局なんだつたのさ?」

勇一はがっかりしたように言った。

「なんだ、わからなかつたのか? いいか、全部、誰が食べるか決まつていない手作りの料理ばかりだ。」

どうも、勇太には理解しきれていないようだ。

「手作りつていうのはわかるけど、誰が食べるか決まっていないうていうのは?」

「いいか、カレーや煮物は一つの鍋で作るものだろう? 人がスライしたような刺身なんか食べたことがあるか? 唐揚げだつてなんだ

つて、たくさん作った中から自分の食べる分を選ぶ。」

「……それがなに？」

变わりに勇次が言った。

「つまり、そこに毒はないって証明になるだろ。」

勇太は聞きなれない言葉を聞いたせいか、目を丸くした。

「どく？そんなものあるわけじゃないか。」

「お前はな。彼女には可能性がある。」

「え？なんで彼女が毒を入れられることがあるのさ？」

「もちろんされたことがもうすでにあるからだ。」

「誰に？」

「あの子の兄弟にだ。俺はあの子に玄関まで遅らせたときに、その話をした。聞いてみると、あの子は毒に反応するキットまで持っていたよ。ついでに、解毒剤までな。」

勇一はため息をついた。

「だけど誰がそんなことするのさ？」

「彼女の兄弟たちだ。」

母親が急に言った。

「だけど、ずっと一緒にお料理をつくっていて兄弟なんて一度も話題に出てきたことなんてなかったわ。お母様……。」

「あたしだって、聞いたことないよ。」

「そりゃそうさ。本当の兄弟じゃない。あれ、父さん！」

兄の言葉に振り向くと、たしかに、そこには、父さんと柊がいた。

「お父さん！」

「やあ。さくらちゃんがいなくなったって、いつから。慌てて、仕事を何とか、片付けてきたよ。」

父さんはさすがに疲れたのか、どさつと、ソファに腰をおろした。

「お前たち、どこまで調べたの？さつさと続きの話をなさい！」

ばあさまの追求におそろおそろ、兄たちは、話し出した。

「たぶん、海藤氏は知っていると思うんだけど、海藤氏はじいさんから依頼を受けて、相続の一部を受け取るに当たって確かに内密に

調べたみたいだ。さくらには男性二人と女性一人の兄弟がいるけど、血のつながりはないんで、遺産はさくら以外には行かないということとをじいさんと取り決めたそうだ。」

「血がつながってない？」

「兄弟どころか親ともつながってないんだ。」

勇次が言った。

「どついう意味だい？」

「ばあさまは少し心配そうに聞いた。」

「さくらは子供のころから天才だったようで特別なプログラムのもと、育て上げられたんだ。それを見込んで今の家族、リーマン氏が養女として引き取った。」

「本当の親は？」

母親が聞いた。

「母親は死亡し、父親は蒸発。彼女は施設にいたんだ。リーマン氏に引き取られたさくらは会社の一つを任せてもらえるほどの才女だった。」

「会社？」

母親は目を丸くした。

「会社といつても小さな規模のものじゃない。当然子供がトップにいたら問題になる。彼女は裏方に回っていたが実質動かしているのは彼女だ。ところで、リーマン氏はもううちのじいさんより年を取っていてかなりよぼよぼだ。そんななか、最近になってとんでもないことを言い出した。」

「なに？」

「遺産だ。」

「あたり。自分の遺産を四人の子供たちに分けると言い出した。」

「そら、もめるだろうなあ。」

「実際、一人は死にかけて病院にいる。長女に当たる子だ。爆弾が車につまっていたらしい。意識があるが、かなりの重傷だ。」

「なんで、そんなことに……。」

「遺産を巡って兄弟で殺しあいつてことか？」

「そうだ。ばれた場合、リーマン氏は遺産を渡さないと堂々と言っているからこつそりやっているんだ。過激なのは長男のキムだな。」

「キム？」

「ばあさまもオレと同じことを思ったのか、聞いた。」

「日本人じゃないのかい？」

「全員バラバラだよ。えっと、さくらが一番下で日本人。姉のフランスはフランス人。長男は中国人だし、次男はイギリス人だ。親である、リーマン氏はアメリカ人だったかな。」

勇次が言った。

「じゃ、さくらも危ないんじゃないか。」

「だから日本に来たのさ。お前の婚約者として。」

「え、意味がわからないわ？」

母親は困ったように言った。

「急に、会社の社長が、外国に長期でかけますなんていったら、会社が危ないんじゃないかと、社員は疑う。そんなの事になったら会社は混乱を起こし、つぶれてしまう。だから、花嫁修業を理由にして、日本に隠れていたんだ。」

「そお……なんだ。だけど、なんで、オレなのさ？兄さんたちだっていいじゃないか。なんで、オレの嫁なのさ？」

「俺達はもう社会人だろう。父さんの後を継ぐ可能性が高い。そんな企業の間同士が婚約になんてなったら、テレビが喜ぶ。ここにいますって、言っているようなものじゃないか。」

あつさりと、勇一が言う。

「その点、お前はまだ未成年だ。顔も出ないし、三男だからテレビも来ない。まだ経営にもかかわってないからな。」

勇次は笑いながら言った。

耳打ちの言葉

「耳打ちの言葉」

「そうだったのかい。」

ばあさまがポツリと言った。

「そうだったのかいつて知ってたんじゃないの？」

オレを筆頭に周りは目を丸くしていた。

「なんで私が知っているのさ。」

ばあさまは、それはそれで驚いたようだ。

「だって一番に最初にじいさまからの伝言だってなにか耳打ちされていたじゃないか。それで知っているのかと……。」

「違うよ。あれは本当にあの人からの伝言だった……。さくらはね、こう言っただ。私はあの子の妹の生まれ変わりだとね。」

「妹？じいさんに妹なんかいないぞ。」

父さんが言った。

「いないよ。だから生まれ変わりなんじゃないか。」

「亡くなられたんですか？」

母さんがためらいがちに聞いた。

「ああ。私とあの子が結婚してすぐに。病気でね。だから私以外は誰も知らないと思う。あるとき、犬を拾ってきたあの子の名前をサクラにしたとき、そつと聞いたんだ。そうしたら、これは犬だから違うだろう、けどもし人の姿なら生まれ変わりが違いないと言っただ。」

ばあさまは一息ついた。

「あの子が死ぬ前に言っただ。生まれ変わりだという者がもうすぐ来るよ、と。あたしは

ばけているのかと思っていたよ。そうしたら、さくらがきたんだ。

あの子にはあの子のことをたくさん聞いたよ。ふだん絶対に私には

言わないことをあの子には言っていたようだからね。」

「じゃあ、ばあさまはさくらのことを知らないの？」

「全然？」

「なんにも知らんよ。」

オレは言葉を失った。母さんのほうを見ると、同じ顔をしていたようだ。

「だって、ばあさま、さくらがオレの花嫁になることはないって、言っていたじゃないか。あれは？」

「ああ、あれは、観察していただけのことさ。いいかい？あの子はお前と同じ年だ。戦争中じゃあるまいし、若い子が自分が会ったこともない婚約者のために料理なんて習おうとするかい？」

「それは……。」

そういわれると、反論の余地もない。

「よっぽど料理が好きだとかお前が好きだとかじゃないとそんなものの、やりやしないさ。」

なるほど。さすがは年の功、亀よりえらいだけのことはある。

「短い間しかいないだろうからお前に尽くすんだと思ってね。その通りだった。」

ばあさまは寂しげにため息をついた。

「父さんの場合」

オレはふと気がついて、父さんにも声をかけた。

「父さんは？」

「ん？」

「父さんも何か耳打ちされていたろう？さくらになんて言われたんだ？」

父さんは、ちょっとためらってから言った。

「写真たての裏。」

「は？」

「僕と父さんの秘密の暗号だ。お前たち、とくに勇太なんかは引退した姿しか見てないだろうから想像もできないだろうが、昔のお父さんは三か月に一度帰ってくるかどうか分からないくらい忙しかつたんだ。それでも母さんに言われたのか、子供の教育には父親の存在が必要だと考えたらしく、子供のころに二人で撮った写真の裏に手紙を残して交換していたんだ。」

「知っていた？」

勇太はばあさまに聞いた。

「あれは、あの人が自分で決めたことよ。やり取りをしていたのは知っていたけど内容は知らないわねえ。」

「へえ。」

勇介は話し続けた。

「しばらくは続いたんだが俺は高校生になってから書くのをやめると言っただんだ。」

「なんで？」

「高校生にもなつて父親と手紙の交換なんかと思っただらうな。」

それで手紙は止まっていたんだが……。」

勇介は奇妙な顔をした。

「じいさんがあるとき言っただ。あの写真たてはまだあるか？」

と。あると言っただらなんだかニヤニヤ笑っていたんだ。だから、急にさくらちゃんに言われてすぐに、思い当たっただ。慌てて見に行ったら手紙があつた。これだ。」

勇介は懐からなにやらガサゴソと出した。

「読むか？」

勇太は手紙を受け取った。

「えーと？」

勇介さま。久しぶりの手紙ですね。

この手紙を読んでいる頃には私はこの世にはいないと思います。その変わりに三男の嫁が行くはすです。私の変わりに大事に扱って

ください。これが私か

らの最後の手紙だと思いますが、未永く幸せに生きてください。

勇太郎

……。おわり。」

ばあさまはそつと涙を拭いていた。

「父さんからの僕に宛てた最後の願いくらい叶えてやろうと思ってね。あの慎重な父さんが認めたんだから、問題もないだろうと思ってね。無条件でうちに来てもらったんだ。おそらく、太郎に囁いていたのも、同じようなことだろうと思うよ。」

「じゃあ誰も、あの子がどこの誰なのか知らなかったってこと？」

「そうなるね。」

「そんな！」

無言の時間が流れた……。

海藤氏登場

（海藤氏登場）

ピンポン

無言を打ち破ったのは、二度のチャイムだった。

ピンポン

「出る！」

オレは玄関まで走った。さくらが帰ってきたのかもしれない。すると。

「おひさしびりでございます。」

そこにいたのは、海藤氏だった。

空いていた、椅子に座ると、海藤氏はいつもの口調で穏やかに話し始めた。

「実は、秘書から連絡を頂きまして。さくらさんがいなくなったとか。それについてのご説明をさせていただこうと、来た次第です。」

「なにか、あの子のことで知っているの？」

「一番に、あの子のことを調べたのはあなたでしたね。」

と、勇一が切り出した。

「勇一さんの言うとおりでございます。私は、勇太郎氏に頼まれて、彼女に遺産を残すように言われました。しかし、顧問弁護士として、誰なのかもわからないような人に遺産を渡すのは気がとがめて、調べさせていただきました。奥様には、大変申し訳ない話なのですが、もしかしたら、愛人なのではないかとさえ、私は疑っていました。」

「で、実際には、遺産なんかいららないほどの金持ちだった。」

勇次が言った。

「そのとおりです。彼女の年収は勇太郎氏とほぼ同じでした。それも黒い噂なども一切なく、珍しく、正統派なのです。」

「さくらは、いま、どこにいるのさ？」

「彼女は遺産争いの戦いから、逃れるために日本にきていました。それが終わったのです。もう、命を狙われる危険がなくなりました。」

「日本の友人の、それも、三男の花嫁修業って名目でだろ？」

「ええ。そして、それは見事にうまくいきました。リーマン氏がなくなるまで、彼女は生き延びたのです。勇太郎氏の作戦は見事にうまくいきました。」

「亡くなった？」

オレは目を丸くした。

「ええ。つい一週間前ほど。」

「さくらがいなくなった日だ。じゃ、外国へ行っているって事？」

「ええ。さくらさんは、お葬式に出ているのです。自分の育ての親である、お父様の。もうそろそろ、こちらでもテレビで大きく報道されると思いますが、ま、話題に上がったとしても、せいぜい一日でしょうな。」

そこまで言うと、海藤氏はずずずとお茶を飲んだ。

「しかし、わからないことがある。」

急に父さんが言い出した。

「なに？」

「なんで、お父さんは、さくらさんのことを知っていたんだろうか。リーマン氏と付き合いがあるなんて話はきいたことが無い。いまでも、ないままだ。いろいろ悪どいことをやっているせいかな。どうも、父さんとは合わなかったと聞いている。なのに、なんで、さくらさんと知り合いなのか。」

「それは。私が。」

全員が振り向くと、そこには柊がいた。

「柊。知っているのか？」

「ええ。みなさまご存じの通り、いまは太郎様の運転手をしておりましたが、それまではずっと勇太郎様の運転手をもやっておりますし

た。私は長年、運転手をしてきました。それは、日本以外でも同じです。ちよつと座らせて頂いてもよろしいですか？歳のせい、ちよつと疲れやすいので。」

勇太は慌てて、椅子を持ち出した。柊はゆつくりと話し出した。

「あれは、十年以上前の話でございます。勇太郎様はアメリカに仕事で行きました。そのときに、せつかくだからお前もついて来いと言われたことがあります。私には初めての外国でした。そのアメリカで、リーマン氏と会ったことがあるのです。彼は、そのときに、勇太郎氏と私にさくらさんのことを紹介しました。」

柊はちよつと目を細めた。

「彼女はまだ、五歳くらいだったのではないのでしょうか。そのときにはもう、リーマン氏には、きな臭い話が出ておりました。人身売買や身寄りのない人物の臓器移植、そして、才能のある子供たちを養子にしているというものでした。」

柊はためいきをついた。

「勇太郎氏はそんなリーマン氏とは付き合う気が無かったようです。どうも、考えが合わない、ぶちぶち言っておりまして。ところが、さくらさんに会ったとたんに、さくらさんに興味を持ったようです。いま、考えると、妹さんと同じ名前だったからでしょう。そして、勇太郎氏はさくらさんだけと食事をしたのです。そこで、毒に当たりました。」

全員が息を飲んだ。

「私は、きらいでそんなに食べませんでした、スープになにか混ぜてあったようです。私は吐き気だけで済みましたが、二人は倒れました。もし、そこで医者と呼ばなかったら命が危ないところでした。勇太郎氏はそのとき、大人でしたのでそんなに大事にはいたりませんでしたが、さくらさんのほうは……。勇太郎氏は、それにずつつきそっておりまして。」

「思い出したわ。たしか、五日で帰るといった出張だったのに、仕事が伸びたとかで十日にのびたことがあったわ。」

ばあさまは急に思い出したように言った。

「そうです。奥様には心配をかけないようにと、絶対に言わないでおくようにと言われておりました。」

「そうだったの。」

「さくらさんが目を覚まされたのは、八日後でした。どうにか、胃の洗浄もうまくいって、とくに問題なく退院しましたが、それから急に、さくらさんと勇太郎氏は付き合わなくなっていました。」

「なんで？」

「そのときは、どうしてもわかりませんでした。最近になってようやくわかったことです。さくらさんが、自分といると狙われるからと、勇太郎氏を遠ざけていたようです。」

「そんな……。まだ小さかっただろうに。」

「ええ。命を狙ったのは、当時十八歳だった長男だったということが判明しました。それで、勇太郎氏はリーマン氏にかけあって、兄弟同士で殺人を行わないように宣言させたのです。その場合は、養子縁組を解除すると。」

「そっか。だから、いまは、そんなに大きく命を狙って来られないってことか。」

その言葉を海藤氏が引き継いだ。

「ええ、日本ではそんなに大きく活動ができなかったようです。また、校内でも校長が目を光らせていたはずです。」

オレはよく、さくらのことを見ていた校長のことを思い出した。

「校長？だから、さくらのことをあんなに見ていたのか。でも、なんで？」

「校長は勇太郎氏の友人です。」

「友人？」

「ええ。まあ、年齢は違いますが、たしかに、友人です。なんでも、昔、命を助けてもらったとかで、慕っていたようです。」

「校長がねえ……。」

ただの変人ではなくてよかったと、しみじみ勇太郎は思った。

「他にも、ボディガードがついていました。帰りは、その者が見張っていました。」

「そんなの、いたかなあ……。」

「勇太郎さまはお会いになっっています。」

「オレが？」

「犬のサクラの飼い主という男性がいたでしょう？」

「ああ、あのオタクみたいなの？あれが、ボディガード?!」

「彼はああ見えても、かなり優秀なボディガードです。」

オレは、目眩がした。どうみても、完全なオタクだったのに……。

「私がさくらさんを迎えに行ったのも、私と勇太郎様だけが顔を知っていたからでございます。」

なるほど、と、全員が納得したように、頷いた。

「ところで、リーマン氏が亡くなって、命を狙われなくなっただけことは、もう遺産が配当されたってことかい？」

勇次が聞いた。

「その通りです。」

海藤氏は穏やかに言った。

「じゃ、もう戻ってこないだろうな。」

勇一は言った。

「なんで？」

「どうして？」

「どういふことだい！」

一度に責められつつも、兄は穏やかに言った。

「いいですか、彼女は一時期、日本に身を隠していただけだ。もう隠す必要がないんだから、向こうで暮らすだろ。向こうには、彼女の経営する会社があるんだ。それも、かなりの大きい会社なんだぞ。戻ってきて、どうするんだよ。」

兄のその言葉に、全員が黙り込んだ。唯一、お茶をずっと飲んで
いる海藤氏以外。

さくらの帰還

くさくらの帰還く

静かになったその時、急に音が鳴った。

「携帯？」

「誰の？」

「……！じいさまのだ！」

全員の目が普段からじいさまが充電していたその方向を見つめた。

「はいっ！もしもし！」

「なんで充電してあるんだ？」

こっそり、兄が言った。

「さくらちゃんが使っていたのよ。」

「さくら！大丈夫か？」

家族中の視線がオレに集まった。

「……は？え、じゃあもうすぐ……。」

ピンポン

「俺、開ける！さくらだ！」

どたどたと全員で玄関へ行くとたしかにそこにはさくらがいた。

「遅くなりました。ただいまです。」

「お、おかえり……。」

ばあさまは泣き出し、少なくともオレは安堵した。

ようやく、全員が揃って、リビングの大きな机に座っていた。遺書が最初に読まれた、じいさまの葬式のようなだった。

「じゃ、お父さんの死目には会えなかったんだな。」

オレは言った。

「会えないのは最初から知っていたわ。私も、お父様も。だから日本にくるまえに挨拶をしてきたわ。それからこれからどうなるのか

も。」

「どうなるって?」

兄さんが聞いた。

「基本的には、一番上の兄さんが遺産を相続すること。他のものは他の兄弟たちで分けること。私はお父様の葬式まで戻ってこないこと。それと……いままで育ててくれたお礼。」

さくらは寂しげにほえんだ。

「確かにお父様は厳しい人だったし、忙しくて会えなくて、寂しかった。それでもお父様なの。会社が大きな利益を上げたときくらいしかほめてくれなかったけど、愛されているのだと思わせてくれたから。」

さくらはにつこりと笑った。

「あなたのおじいさまはもつと素敵な人だったけど。」

「じいさまがねえ。」

「勇太郎は、本当に、本当にすばらしい人だった。その勇太郎から、手紙をもらって。それもわざわざ、終さんが自分の手で持ってきてくれて。この家に来ないかと言ってくれたときには、本当に、泣いたわ。そして、二つ返事で行くといったの。」

「お葬式にもこっそり参加できたし。ここで暮らせてよかった。」

「さくら、あんた、向こうに戻るのかい?」

ばあさまは静かに聞いた。

「ええ。」

「そうか。」

「でも、ちよつとの間だけです。」

「え?」

「実は、海藤さんと話を進めているんです。会社の権利を譲り渡そうと。そして、私は、母国に戻ろうかと。」

海藤氏はにやりと笑った。

「つまり、日本ってこと?」

「ええ。」

「じゃ、うちにいるのかい？」

「いえ、それは。でも、近くにもう家を買いました。」

「買った？なんでだい？ここに住めばいいのに。」

「いえ。これでは、フェアな戦いにはなりませんからね。」

「フェア？戦い？」

「いいんです。あ、それと、全部解決したら、勇太郎の声を持ってきます。」

「声？」

「はい。勇太郎が最後のメッセージをくれました。育ててくれた父のお葬式から二週間がすぎたら、こっちに送られてくるはずです。」
さくらはにこやかに笑った。

「じいさまの声」

二週間後。本当に、ディスクが一枚送られてきた。それを聞くにあたって、本当にいとこまで含む、全員が集まった。さくらはまだ向こうにいた。まだ、手続きが難航しているようだ。

「……。えー、おっほん。」

「じいさまの声だ。」

「静かに。」

ばあさまがたしなめた。

「皆さんがこの、私の声を聞いているということは、ほとんど、片がついていることだと思う。これは、私、勇太郎からの最後のメッセージである。おそらく、梅子はさくらを向かい入れてくれただろうし、太郎も勇介もさくらを向かい入れることに反対はなかったものと思いたい。さて。これより、勇太郎とさくらの婚約を解消する。」

「え？えええ？」

本人がいけないというのに、オレは声を上げてしまった。

「さくらも勇太郎も誰と結婚してもよいとする。もちろん、全員の

遺産相続は最初にしたままとする。」

「よかった。」

ほっとしたように、叔父は言った。

「そして、さくらが三十までに誰とも結婚しなかった場合、我、遠藤家の養子にする。その件については海藤氏にお任せする。」

「養子……。」

「皆の者、いろいろあつて、申し訳ない。しかし、その騒ぎで、私がいなくなった寂しさもなかったことだろう。みな、仲良く、幸せに、長生きしてくれたまえ。以上。最後に、梅子、長い間ともにいてくれて、ありがとう。」

そして、ディスクは止まった。

ばあさまはそれを取り出すと、本当に、大事そうにそつとケースにいれて、部屋へともって帰った。

そして、その日。

みんなで食事をした。葬式以来、全員が集まっている。

梅は食事風景を眺めながらさくらがきた理由のことを考えていた。さくらが遺産だと言っていたのは、勇太郎のためではなく、さくらだけのためではなく、この家の為ではないかと。

自分が若いころに、台所を譲ってもらえなかった悲しみから、お嫁さんにはできるかぎりすぐに譲った。でも夕飯ができるまで部屋に閉じこまっていた。

息子は忙しくて、話など出来なかった。

孫たちは出て行つてからじいさまの葬式まで一度も顔を見せなかった。

勇太郎は家にいたけれど部屋からでてこようとしなかった。

食事も一人だけ、和食。服を洗うのも自分の分だけ。できるだけ手を煩わせないように迷惑をかけないように生きてきた。

けれど、さくらが来てから変わった。料理を作り始めた。服を洗い出した。さくらと一緒に墓まで出かけることも増えた。

家を出て行った孫の二人はさくらの素性を心配してか、家に来たりこつそり電話をくれたりした。

まるでじいさまと犬のサクラが生きていたころのように、サクラを話の中心にするように、リビングに人がいる。

どうかした？

「え？」

「箸、止まってるけど。」

勇太郎が言う。

「あ、あら、いやあねえ、ぼんやりしてて。」

「あゝ、あんまりぼーとしてると勇太郎にコロツケ取られるよ。」

「なんでオレなんだよ！」

「ムキになるところがあやしい。」

「兄さんたち！」

みんなが笑った。

平和な結末

平和な結末

「さくら！」

勇一は帰ってくるなり台所にきた。オレはこんなに慌てている兄貴を見たことがない。

「あれ？さくらは？今日は来ていないのか？」

「こつちにいますよ。」

さくらののんきな声が聞こえた。

居間から声がした。

「そこか。リーマン社が倒産したぞ！」

「知っていますよ？」

さくらは、のんびり言った。

「もう？なんで？」

「兄の経営方針がぎりぎりにまできていることがわかっていましたから。」

「じゃ、遺産を受け取っても無駄と言うことが……。」

後ろからオレは言った。

「彼にはそうでしょう。私は一番小さかった頃のリーマン社を持っています。だから私の会社は本社になります。」

「どういうこと？」

「名前だけが残ったってことよ。」

「そうだが、みすみす潰さなくても……知っていたなら、なにか手を打てたんじゃないか？」

兄はなんだか、しぶそな顔をした。

「いいえ。自分が盛った毒を自分で食べるときがきたのです。多分これからの人生は逃げる

か裁判かの一生でしょう。父は言っていました。自分のことは自分でと。」

きっぱりと言ったさくらの言葉に兄貴はなにもいえないようだ。

「今日はもやしとお肉の炒め物です。食べて行きますか？」

「もらつよ。」

「はい。」

さくらはにっこりと笑った。

さくらは、本当に家を買っていた。と、いつでも、本当に近くでよくここに母さんたちに料理を習いに来ている。向こうの暮らしが長かったせいか、ほとんど日本料理を食べていないらしく、習うのが楽しいのだとさくらは笑っていた。

犬のサクラの墓にもじいさまの墓にも本当にお参りをしていた。

「夏服にしたのか？」

「うん。今日も暑いねえ。」

さくらは空を見上げた。てくてく歩きながら、オレは東さんのことを聞いてみた。

「理江さんがみたのは、私とボディガードとの会話だったの。」

「ああ、あのオタク風の。見事に騙されたよ。」

「あら、あれは、彼の趣味。本当にあの格好が好きなのよ。下には、防弾チョッキ着てるんだけどね。」

恐ろしい、日本文化の広がり方だ。

「じゃ、東さんを襲ったのは？」

「他のグループみたい。」

「他の？」

「私を狙っているのは、兄さんだけじゃないのよ。他の会社のメンバーもいるし、テロリストなんかもあるし。誘拐のターゲットになるからね。」

「え、今も？」

「今は、完全にはないとはいえないけど、減ったわね。日本だし。」

「へえ。」

「相手に交渉するのに、三日もかかっちゃって、大変だったけど、彼女が無事でよかった。こんなことがないように、一人で帰っていたのに、まさか、後から付いてきているとは思わなくて。」

「だから、先に帰っていたのか？え、でも、行きは？」

「行きの人数よりも、帰りのほうが確実に人が少ないでしょう？」
「なるほど。」

「それに勇太郎の家の作りもよかった。」

「そうか？」

「うん。必ず、誰かに見られる場所に家があった。こっそり行動つていうのは難しいくらいに。」

「あ、かもね。」

電車に乗ると、さくらは言った。

「木村君がいないね。」

「ああ、試合が近いからね。」

「そうなの？」

「ああ、夏だからな。」

「へえ。あ、そうだ、もうすぐ、勇太郎が好きな東さんが乗ってくるね。」

「な、なんだよ、いきなり。」

オレは急に言われて、真っ赤になった。さくらはそんなオレを見て、笑った。

「あたしね、家を買ったのはね、正々堂々と理江に勝って、勇太郎に振り向いて欲しかったからなの。」

「へ？」

「一緒に住んでいれば、たしかに有利だけど、それじゃあねえ。」

「そ、それだけで、あのでっかい家、買ったの？」

「そうよ。あ、理江だ。おーい。」

さくらは手を振った。たしかに、東が笑いながらやってくる。オレはなんだか、まだまだ女性たちに振り回されるような気がしていた。

くおまけく

「お前、今度、さくらと同じ学校に行くんだって？」

男は、蒲団の上でタバコを吸いながら言った。

「ああ。親父が、あの子を落とせってうるさくてな。」

「あの子は遺産なんか、持ってないぞ。」

「知ってる。けど、会社経営の才能があるからな。父さんはそれが目当てなんだろ。」

「本気で落とすのか？」

「まさか。女性は好きじゃない。勇次だって、さくらをくどいたんだって？本気なの？」

「あいつは、オレたちの関係知ってるんだぞ。」

「え？」

次郎は目を丸くした。

「そうなの？」

「ああ。ちよつと脅したら、言っていた。「次郎さんが泣きませんか？」って。」

「そんな……バラされたら、僕は……。」

「次郎。」

勇次は、次郎を抱き寄せた。

「さくらはばらさないだろうが、どうしても、というときは、オレと来ないか？遠藤家を捨てて。」

次郎は少し、勇次の目を見つめていたが、にっこりと微笑んだ。

「ああ、あんたさえいいよ。」

声は再び、暗闇の中に紛れ込んでいった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1764b/>

じいさまからの遺産

2010年10月8日13時43分発行